



41
128



始



41-128



社會學

建部遯吾著

大正
7. 12. 16
内交

普通社會學
第四卷

社會動學序說

社會動學目次

第一篇 社會進化論

第一章 社會進化の要義

- 第一節 緒論
- 第二節 社會進化の豫件
- 第三節 要素の關係及效果
- 第四節 理勢の範疇及相關
- 第五節 社會進化の理法の觀念

第二章 社會進化の方式

- 第一節 汎論

目次

—

第二節 社會進化に於ける加速度の理法 五四

第三節 社會進化に於ける遺傳の理法 五九

第四節 社會進化に於ける度制の理法 六四

第五節 社會進化に於ける自然淘汰の理法 六八

第六節 社會進化に於ける意識的淘汰の理法 七六

第七節 社會進化に於ける理想的淘汰の理法 八〇

第三章 社會進化の實質

第一節 緒言 八四

第二節 思想の開展 九一

第三節 性能の發達 九七

第四節 人格の進歩 一〇五

第五節 社會的自覺の發達 一一〇

第六節 社會組織の進歩 一二七

第七節 社會對關の進歩 一二七

第八節 社會進化の實質の總束 一三一

第二篇 社會理想論

第一章 理想汎論

第一節 緒論 一三五

第二節 理想の發生 一三九

第三節 理想の要素 一四〇

第四節 理想の規定 一四三

第五節 理想の自由 一四六

第六節 理想の決定及實現 一四九

第七節 理想の實質 一五二

第八節 主義 一五五

第九節 理想と學理 一五九

第十節 個人的理想及社會的理想

一六一

第二章 個人的理想

- 第一節 緒論
- 第二節 根本理想
- 第三節 行爲の標準に基づく理想
- 第四節 行爲の效果に基づく理想
- 第五節 人生觀に基づく理想
- 第六節 個人的理想の價值

一六七
一七〇
一七八
一八五
一九四
二〇二

第三章 社會的理想

- 第一節 緒論
- 第二節 體制の形式に於ける理想
- 第三節 體制の實質に於ける理想
- 第四節 運營の方式に於ける理想

二〇五
二〇九
二一九
二三〇

第三篇 文明論

第一章 文明汎論

- 第一節 緒論
- 第二節 文明の義解
- 第三節 文明の屬性

- 第五節 運營の實質に於ける理想
- 第六節 社會の統制に於ける理想
- 第七節 社會の對關に於ける理想
- 第八節 社會の生活に於ける理想
- 第九節 社會の修養に於ける理想
- 第十節 社會の職分に於ける理想
- 第十一節 結論

三三三
三一八
三三一

諸家要覽

..... 卷尾

題 後

..... 卷尾

歐文總覽

..... 卷尾

第一篇 社會進化論

第一章 社會進化の要義

第一節 緒論

社會學の問題の中について、社會の現象の研究より、進みて社會の運命の講明を以て旨とする者は、即ち斯學三大部門の最後なる社會動學を成す。

運命の問題は如何にあるべきかの問題なり。如何にあるべきかの問題は二個の問題の抱合と看做すことを得、如何にあらむとするかの問題、及如何にあらしむべきかの問題、即ち是なり。甲は變遷進動の勢を繹ね、乙は變遷進

社會動學 (La Dynamique Sociale) 一名呼ぶ。社會運命論 (La Destinée Sociale) といふ。近時片々たる歐西の社會學者には往々之を閉却する眞學なる學者之を以て此を顧



動の理を繹ぬ。理勢の相須ちて以て社會の變遷進動を効果するは、研究を須ちて確立を要する事項たり。乃ち勢を繹ぬるに於いて社會進化論を成し、理を繹ぬるに於いて社會理想論を成す、此二目は乃ち社會動學の要部を形成す。

社會の變遷に於ける理勢の効果は甚だ複雑なる相關に於いてし、其孰か主にして孰か従なるの疑問に論理上明快なる判別を試むること難し、乃ち社會進化論と社會理想論とは、其論理的敘述の順序に於いて、一定の次第を爲すを須るず、今暫く勢の取扱を先にして理の取扱を後にすと雖も、此次第を逆にする、亦太た妨げず、要は兩者の渾融して社會の變遷進動を効果し社會の運命を決定す

II
Social Evolution.
III
Social Ideals.

IV
Civilization.

るの處に矚目するに存す。乃ち此兩篇の敘述の後、更に文明論の一篇を加へて、以て社會動學の總束と爲し、以て普通社會學の結末と爲さむとす。

社會の動學的研究は、社會の靜學的研究と相駢びて、社會の科學的研究に必要なもののみならず、實に社會學の講明の主旨其者に向うて一步を進むるに於いて最も重要な意義を有す。靜學的研究は現象の研究に過ぎず、其知識は唯客觀世界の寫象として意義を有するのみ、動學的研究は則ち運命の講明にして、其知識や實に主觀的に行爲の動機を決定するに與る、即ち學問の目的に向うて一步を近づけたる者なりとす。是故に往古希臘哲學の盛時、若くは支那の教學の始源に於いて、人生社會の考察は寧ろ毎に動學的考察に偏せり、亦學問の目的の把持を見る。然れども動學的研究は必ず靜學的研究に其資料と根基とを仰がざる可からず、然らざれば、認むる所の事實は假定に止まりて、造る所の斷定は妄想臆斷に過ぎざらむ。是故に近世科學的

研究の起り来るや、社會の研究は必ず靜學的研究を漏らさず、即ち確實なる知識の建設を期するなり、然るも亦往往此に止まるゐる、是れ學問の目的を遺るゝ者、靜學の動學と相待ち相輔けて、社會の研究乃ち完し。

社會動學の研究、その重要は之を認めざるに非ざるも、而も其困難なる、今日學問の進度に於いて殆ど之を不可能と做す者あり、ル・スタインの如き、即ち是れ、然れども困難は不可能を意味せず、今日斯部門の造詣、或は他に比して數着を輸するも、而も以て不可能と爲して之を廢するは不可、抑、社會動學、その體系的講明は、甚だ多く之を見ざるも、社會進化の取扱は、比比として頗る乏しとせず、コムト、スペンサル、遠くはサンシモン^六の如き、夙に之を論じ、近者ド・グレエフ^七、ノボコフ^八、ルムス、フエアバンクス^九等、皆之を懈らず、ワアドの如きは、最も社會研究の此方面に腐心す、社會理想の取扱は、從來學者の殊に體系的吟味を懈りし所なるも、第十九世紀の後半に於いて、社會主義の論議一世を驚動し、學問的頭腦ある經濟學者の盛に此問題に立入るあり、尋い

五 Ludwik Stein: Soc. Fr. i. L. d. Phil.

六 Doctrine de St. Simon, 1828-29, p. 165-192. Loi du développement de l'humanité — verité de l'histoire — cette loi par l'histoire. 氏謂へらく、人類の争は次第に減して、字內的協同生活の方向に於て、人類の確なる目的は、間の道徳的物質的、智能の狀態の常進歩的なる改良による、また、改良の爲に在りて、協同生活に在るべきことを示す。

七 De Greef: Trans-formisme Social 同名 〇巻、p. 835-864. Victor Constant 著、Politique Positive, p. 102-129. Transformation sociale を論ず。

八 J. Novicow, Cours, et Vol. sec. Chap. XI. 人間社會に於ける思想の進路は、心的四圍の現象なりと論ず。

九 Wornat: Org. et Soc. 社會の成長には Extension, apposition, Coelimaire et organique, segmentation, resorption の四つあり、この個體に同じく、p. 266. Développement de Société. 一〇 A. Fairbanks: Intr. to Sociology, Chap. XI-I, XIV.

で政治學者の容喙を敢てするありて、亦漸く社會理想の考察に對する學問的結束の運に向ふ、ワグネル、シュモルレル、リスト、ラッツェンホッフ^九等は、此事功に向うて錚錚の響ある者なり、今や此両面各部を統整し、併せて其兩部を統一し、以て多少成形的なる社會動學の基礎を置くこと、即ち本卷の目的、兼ねて其史的地位なりとす。

社會進化の理論は、之を三の範疇より考察するを便とす。社會進化の要義は、一般に進化の大理想の講明を次いで、社會進化の全體としての性質を定め、社會進化の方式は、進化の理法の社會各般事象に流形する形相を明にし、社會進化の實質は、進化の社會人生に於ける内容價值を詳にす。

社會進化の取扱は、其事項の複雑なるが爲に、從來或は錯雜紛更、或は單純淺薄、未だ以て斯大問題を取扱ふに足らざるを多しとせり、ス

二五 Bracke, 其他經濟學に於ける歴史派は亦多くこれが例を供す。

二六 Herder, これに屬す。

二七 Bossuet, これを代表す。

二八 這般哲學觀に於ける各種思想の系列分類は拙著哲學大觀を本支所説の註脚として参照すべし。

二九 L. Bonhoeffer: Les Lois de l'Histoire, 1881, 亦國を異にして夙に此見解に造る。唯其人間進化の動因 Motens de l'évolution humaine, 此を謂ふは甚だ佳なれども、之を眞善美の理想に歸して以て人間開闢を要約せらばあまりに旨味に乏しとす。

論は此人間經驗の總計たる歴史發展の大勢觀にも亦其全幅に於いて現れ來るもの、是れ上述各種の見解を成せるなり。

歴史に於ける理法觀が、新なる人間世界の學問的見解として其光榮ある地位を占め得たるや、淺見短識を以て這般理法を速斷せむとするもの、亦出づ、歴史は毎に繰返すとする歴史的反複論、歴史の進動は一定の實質的目的に歸向すとする歴史の結局論、歴史現象の運行は時計の鍼の運動に類すとする歴史の機制論の類、即ち是なり。

大凡そ社會進化の大理法は、進める新なる歴史觀を仔細に周密に考察し究明せるの大なる産物にして、而して人間の社會を介し宇宙に對する眞價も始めて茲に見はれ來たるもの、乃ち今先づ這般の衆説を裁して之を批判し、社會進化の大理法に立てる新にして正しき歴史の理法觀を簡單に敘せむとす、而して是れやがて社會進化の豫件の究明を供す、亦是れやがて思想を社會進化の研究に導き、これが意義重要を體得するに導く所の豫備考察を供する所以なり。

學問の目的は人生の進歩に在りと謂ふ、豈唯學問のみ

ならむや、人生其者に於て若し目的の言ふ可きありとせば、それは必ず亦進歩に存せざる可からず。人生は知行の連續なり、知は理想なり、行は實現なり。知行に合一觀あり、理想は實現を含む、然らざれば是れ空想なり。夫れ知行の合一、理想の實現の可能には、二個の豫件を存す、一には萬象の恒常なり、二には人の自由なり。

三〇 普通社會學第二卷社會學第一節及第二章殊に其第一節及第二章節参照。

三二 前同書第一節第二章殊に其第二節参照。

萬象の恒常とは何ぞや、宇宙各個の現象に於いて、其相關秩序の一定不紊なること是なり。所謂同一原因は同一事情の下には必ず同一の結果を將來すといひ、將た原因總べての和は結果總べての和に等しといへるが如き、皆此事項の説述にして、宇宙に理法ありといへる觀念、因縁果報の敎説の如きは、皆物理的若くは道理的に此事理の發現せるを指せるものに外ならず。

人の自由とは何ぞや、人は唯東せむと欲し西せむと欲するの自由

あるのみならず、東せむと欲すれば則ち東し西せむと欲すれば則ち西するの自由あるの謂なり、東せむと欲し西せむと欲するの自由あり、故に宿命説は許容すべからず、東せむと欲すれば則ち東し西せむと欲すれば則ち西す、唯夫れ人が東し西するは、既に一個の客觀的現象にして、此點に於いて人の行動は天然現象と正に相類似す、現象に關しては萬象恆常あり、是故に人の東し西するは所謂宇宙の理法と一致せざる可からず。

凡そ萬象恆常と一致するに於いて、人の自由は、能く人が欲する所の事を成す。人の理想、即ち知に於いて、萬象恆常、即ち萬有の理法を儲へざるときは、人は自由なること能はず。人は行かむと欲する處に行き、止まらむと欲する處に止まること能はず。人の自由なるは、其能く理法を知るに賴る。是故に知ある所必ず行あり、行ある所必ず知を

豫想す。乃ち知行は合一なり。

從來此問題に關しては調和すべからざる二説存すと信ぜられたるものの如し、其一、必至論は謂へらく、理法は普遍なり、人も亦固より焉を免れず、則ち何處にか人の自由あらむと、其二、自由意志論の要にいふ、意志は自由なり、理法は無境界にのみ存す、人間の意志には選擇の自由あり、理法は之を奈何ともすることなしと、此二説の共に誤れるは明なり、理法は普遍なるも人の自由に於いて何か有らむ、人の自由なるは却りて萬象に恆常の理法あるに賴る、焉ぞ自由を妨ぐる理法の存立あらむ、則ち意志は自由なりと謂ふ、亦是れ事實に反す、意志は動機の司配の下に發動し、動機は智情の制縛を脱離する能はず、是故に人的現象、即ち人間行動の自由なるは、決して意志の自由なるに非ずして、乃ち人の自由なるなり、斯の如く詮じ來れば、彼兩説が兩兩相容れず、水火の觀を呈せしは、各其爭議の範疇を詳にせざりしが爲のみ、一たび其範疇を審明して之を人的現象の一點に約す、彼等兩説の骨子たる、理法と自由とは、實に相衝突することなきのみならず、亦

實に相頼り相輔けて、以て人間行爲といふ一類の現象を效すものなるを了るべし。

個人三三の生活は意識ある生活なり、社會の生活も亦意識ある生活なり、個人三三の生活は人的現象なり、社會の生活も亦人的現象なり。個人生活の可能、個人生活に於ける進歩の可能を立する、乃ち進みて社會生活の可能、社會生活に於ける進化の可能を立すべし。

個人生活の可能、其進歩の可能に關して二種の異見を見たり、乃ち社會生活に於ける、亦同様の異見の成立を期待すべし、果然歴史現象に關する爭議の中心的要點を結束すれば明に二派の異説あるを見る、甲を結局論又結局史觀とし、乙を機制論又機制史觀とす。

結局論の要旨は次の如し。人間社會より、以て日月星辰に至る、時間の連續を經とし、空間の接續を緯として無量に生起する宇宙凡百の

本書第三卷第二章社會學
第四節參照、章殊に其

現象は、一として一個の目的、一個の結局に向うて行進する各節に非ざるはなし。縱令此目的結局の何たるかは未だ充分に闡明せられずとするも、如何か是れ此目的結局に向うて一步を進むる所以たるかは、吾人の既に過去の歷程を回看して知了せる所たり、乃ち個人の行動云爲に於いて善と判じ不善と斷ずる、亦唯此一步に協合するると否とに依據せむのみ。歴史の潮流は無限なり、恆常の連續なり、各時各期に於ける人の天職、それ既に進歩の大潮流に向うて一個の寄與を致すに在れば、各人の天職は其歴史的地位によりて先天的に一定せるものと謂はざる可からず。如何にして這般個人の歴史的天職を認知すべきか、歴史は毎に自個を反復す、希臘のソクラテスの後に希臘のプラトオン三三の出でたるを見れば、近世のソクラテスの後に出づるものは亦近世のプラトオンたるを期せざる可からず。個人は決して自個の任意なる行動に出でて、以て歴史的潮流に反抗を試む可からず、反抗は即ち自滅を意味す。

機制論の要旨は次の如し。宇宙は一の機關に似たり、物理的理法の

全般を支配するのみ、凡百の現象皆全機關の一部分として作用し、各個は自個の目的を有することなし。理法の支配の爲に、個人亦目的と自由とを有する能はず、則ち這般個體の衆合より成れる全機關も、亦一個の目的に向うて行進する者に非ずして、乃ち唯既定の機制の制約に隨ひ、理法の規定に隨うて、必然的に、盲從的に、運行するのみ、斯かる運行の連續、即ち是れ歴史現象を成すものなれば、歴史に於ける前件後件の關係は、單に物理的因果律の充分に説明し得る所、是故に事實は善の認證なり、社會に於ける個人の行爲も、唯その成り行くがまゝに爲し行くべきのみ、宇宙の事は、すべてなる事あるのみ、豈復た別にする事の在るあらむや。

右二類の議論は、實に社會現象より以て宇宙現象に至る、凡そ現象界の動學的説明に於いて、對立して相争へるもの、所謂歴史哲學觀に於ける兩極の見解を成す、然れども、二類は相争ふの資格なし、其相争ふは猶自由意志論と必至論との如し、争點は根幹に在らずして枝葉に存す、根本的問題の解釋は兩者共に之を失す。

機制論者は物的理法の普遍を信ず、是れ猶可なり、而も之が爲に人の自由を没却せむとす、其過誤や必至論者と揆を一にす、其する事の存立を認めざる、其事實は善を認證すと謂ふに至りては誤亦太だし、是れ到底宇宙現象に於いて物界を見て人界を見る能はざるもの、亦多言を費して之を評するを須むず、結局論者に至りては、其迷妄の由来此の如く單純ならず、今更に三條の提説を以て之を啓くの要あり。

第一、宇宙現象の運行には一個の目的結局ありと謂ふこと。何を以て之を謂ふか、二様の解釋は成立し得べしといふ、甲に個人の行動が、毎に必ず自覺的に目的、若くは無自覺的に結局を有するより類推して、宇宙の森然たる現象の體系は亦必ず一定の目的結局あるべしとすること、乙には宇宙現象の過去の經歷を觀察して多少一個の極限に向うて近づくの事實ありと認定し、是より類推歸納して、永遠なる未來に於いて一個の結局的境地の到らむを期し、宇宙現象の運行は常に之に向ふものなりと斷ずること、是なり、甲は類推の虚偽を冒せり、個人を以て宇宙を推すの本據安くにか在る、神學者第一原因の

存在を説明するや往往にして這般の誤謬を冒す、結局論者亦其流亞なり、乙に到りては、類推の效力尋常以下に在りと謂ふ可からざるも、其前提に於いて果して能く正確にして些の誤謬なきを保し得るか、過去を觀察して以て其歷程には云云の方針ありとせざるべからずと爲す、而も設し過去にして其ありし所と正反對の歷程に出でたりとせむに、這論法に隨はば、更に他の云云の方針ありきと謂ふに出でむとす、則ち此説は既成に隨うて説明を立つるもののみ、乃ち若し未來に於ける社會現象の歷程にして東せんか、彼乃ち東すべき必然の方針ありと説くべく、西せむか、彼乃ち復た西するが是れ結局の目的に向ふ所以なりと説かむとす、是れ何を以て説明と稱するに足らむや、是故に所謂結局目的の説は、充分の證明なき一個の空想に過ぎざるなり。

第二、人の天職は先天的に一定せりと謂ふこと、薄弱なる結局論の基礎より來る推論の確實ならざる亦殆ど論を須たず、人の天職を以て先天的に定まれりと爲すは、是れ一個の宿命説なり、一個の必至

論なり、抑、人の自由を如何にせむとする、社會の潮流滔滔として不是に向ふに際し、所謂英雄は改革者として出で、乃ち逆境に立ち逆流に棹して狂瀾を既倒に回さむとす、若し逆を以て惡と爲さば、改革とは狂氣の異名と爲らざる可からず、抑、潮流は見在なり、勢なり、若し循勢を以て進歩とせば、進歩は理想の實現を以て行動とする、人の事業と爲る可からず、進歩は客觀的となり、星學的生物學的となり、人的社會的とならざるに極まるべし、蓋し從來蒙昧なる空想的妄信的生活より出でて俄然として光明赫耀たる自然科學競進の世界に入るもの、未だ真正確實に科學を理會せず、其新説に逢ふや、一にも二にも其適用の範疇を擴うせむとす、乃ち物的進化を認めて其空想妄信を脱するの端を發くや、直に以て人的進化を沒却し、人の之を説くある、乃ち之を一排し去らむとす、物的進化已に其中に於いて幾段の進程を歴來たるもの、其更に一步を轉ずるや、輒ち人的進化の段階に進むべきを了らざるなり、凡そ撞着衝突を以て現象世界の通態と爲すものは、其腦力狹隘薄弱にして、聚成調和の機能を成すに堪へざるものなり。

物的進化と人的進化、理想と見在、理と勢、理法と自由斯の如きは是れ皆吾人の世界觀人生觀に於いて寧ろ相待不可缺の要素たり。是故に特定の時代に於ける人間の天職を以て先天的に一定せりと爲し、何等所謂英雄の歴史的功程を認めざるものは、自ら大なる進歩思想を以て居るも、而も既に人的進化の殺楮にまで進める宇宙をば、更に曩昔の物的進化の段楮に引き戻さむとするもの、學者としては著しき退歩主義者なり、個人としては絶底の自屈者なりとす。

第三、歴史は毎に自個を反復すと謂ふこと。之に對して可能なる説明二様存す、甲には必然の理法に據りて、此に至るとすること、乙には過去の歷程より類推歸納してしかいふこと、是なり。必然の理法として如何の事項か斷せられ得る、未だ之を聞くを得ず、然らば則ち其本據は更に實驗的に乙に在りとするか、試に論者が其實例として示す所を聞くに、曰ふ、近世哲學は希臘哲學と同一の軌道を運行しつゝ、あり、ソクラテス、プラトオン、アリストテレエス三氏の相尋げるに對し、カント、フヒテ、而してヘエゲル相尋げりと、噫、是れ枚舉歸納法の尤

も薄弱なる應用の一例のみ、世の淺識の徒、往往その所謂比較研究に於いて些の相近似せる一雙の事實を提へ來りて、直に單に時處の關係のみを異にせる一雙の物理的事實の如く、兩般の事項全く同一なりと妄判速斷す、學界の一大弊習と謂はざる可けひや、是故に歴史反復説は、唯常識に於ける一種淺近なる譬喩觀たるの價值を有するのみ、歸納的にも、演繹的にも何等の本據なき、科學上無價值なる一種の歴史哲學觀に過ぎざるなり。

凡そ機制論及結局論、此二種の史觀が斯く誤謬として排斥せらるべき災厄に遭逢せるは、現今の宇宙が既に人的社會學的進化の時期に進めるが爲なり。

夙に個人に關する人的現象に於いて理法と自由とを要件とし、人之自由説を立して以て自由意志論と必至論とを排す、乃ち社會に關する人的現象の取扱に於いて、亦理法と自由とを要件としての人の自由を、不磨の基礎とせる自由説、又自由史觀を立して、以て結局論と機制論とを排せざる可からず。

凡そ本論の論旨は、
 三、その論旨は、
 二、その論旨は、
 一、その論旨は、
 五、その論旨は、
 四、その論旨は、
 三、その論旨は、
 二、その論旨は、
 一、その論旨は、

宇宙現象の運行には、萬象恆常に據由する理法の準繩あり、是を以て人、誠に能く其知を致すときは、知と行とは完全なる合一を得、人は茲に完全なる自由を享有す。人格の發達の完全なるに隨ひ、知行合一は完全に、自由は完全なり。夫れ歴史は社會生活に於ける行なり、學問は社會生活に於ける知なり、乃ち社會生活進行開展の根本原理はこれ社會學的史觀の根柢にして、名づけて自由史觀と謂ふ。其要綱左の如し。

第一、社會的知行合一の原理。特定の社會が有する歴史の總和は、そが有する學問の總和に均等なり。換言すれば、兩者各其完全なる包含に於いて、歴史の外に學問なく、學問の外に歴史なし。^{三五}

本著第一卷第一篇第二章に學問の論述参照

第二、社會的自由の原理。社會に於ける理法の普遍に賴り、之に準由して理想の實現は自由なり。此事、人に於けるも、社會に於けるも、相異なることなし。^{三六}

第三、對數的進化の原理。社會生活の運行する徑路は、各時點に於ける社會の知、即ち社會理想の總和によりて、微分時間だけ、是より後るる時點以後に於ける徑路を決定す。徑路の決定は當該時點に於ける速度の決定に本づく。這關係に於ける速度の變化は、時間に對して對數函數の關係を有するものにして、其結果は社會的進化、即ち進歩なり。^{三七}

本著本篇第三章第一節、第二章第五節參照

本著第三卷第一章第八節參照

本文の三根本原理は、尙更に、後篇後章に於いて説明せられ、證明せらるべし。

斯の如く看來れば、社會生活の開展、即ち歴史の進程に於いて、人間が如何なる地歩を占むるか、は明なりとす。歴史開展の大觀は、要するに人の大觀なり。以上を豫件として、乃ち直に社會進化の要義の考察に進むべし。

第三節 要素の關係及効果

宇宙進化の方式が六種の理法より成立するよりして直に明なるは、社會進化が物的及心的二要素を有することとなり。社會の要素に物的要素と心的要素とあり、社會の規定に物的規定と心的規定とあり、社會の動因に亦物的動因と心的動因とあり。社會の變遷進動は、要素と規定とより構成せる社會に於ける其動因の效果に外ならざ

本書三八
第二篇第二章參照。

るを以て、乃ち社會進化が亦物的及心的の二要素を有するを推定すべし。

社會進化の要素とは、社會の要素規定及動因の外に之有るに非ずして、這般の三項の中、直接に社會の變遷進動に與る者に名づくる總名に外ならず。社會進化の要素に物的及心的の二種ありとは、社會の要素規定及動因に物的及心的の二面あるの事實を指すに外ならざるなり。社會進化の物的要素は、社會の物的要素、物的規定、及物的動因に外ならずして、其心的要素は社會の心的要素、心的規定、及心的動因に外なることなし。

物心二元の觀念の相關は既に詳に見たる所、所謂一元論的若くは二元論的見地に關しては、今一辭を贅するの

本書三九
第一篇第二章參照。

要なし。社會進化は物的要素と心的要素との協合作業なれば、社會進化を以て唯物的現象と爲すは、之を唯心的現象と爲すと同じく、共に背理の斷定たるを免れず。唯物的現象に在りては、物的機制の司配、普遍にして透徹なり、其變動を司配するの理法も、亦唯見在的理法に外なることなく、即ち唯あるとなるとの外なる能はずして、理法や純然説明的たるに止まる。唯心的現象に在りては、意識的自由の司配、普遍にして透徹なるが爲に、必然的前件後件の關係は其變動の連續の際に成立する能はずして、理法は理想的理法たるに止まり、すべき若くはあるべきの規定、即ち規範的理法の可能なるの外、單純なる説明的理法の立つ可きあるなし。是故に世間若し唯心的と同時に唯物

的なる現象の成立ありとせば、全然理法の求むべきなきか、若くは説明的及規範的兩種の理法の同時普遍的成立なかるべからず、然も斯かる現象は不可能なり。唯社會現象に於いて亦物亦心的現象あり、物的要素は心的要素と密に相關係するが故に、相調攝協合して以て社會進化を成す、而して社會進化の理法は、幾分は説明的理法なり、幾分は規範的理法たり、社會進化は、一面は勢の現象なり、一面には則ち理の現象なり。社會進化の現象は一方には必然的去來の説明を容れて、而も一方には理想の自由活動の餘地の充分に存するものなり。

社會進化は社會現象の連續去來に外ならず、社會現象は社會の要素及規定に社會の動因の作業せる者に外な

らず。社會の要素は一般に衆社會の形式の資料因子たり、社會の規定は要素の内的及外的屬性に於いて存立す。社會の要素及規定、以て靜的狀態に於ける特定社會の觀念を成す、社會の動因此に加はりて、社會は乃ち實在に於けるが如く動的狀態に於ける完全なる觀念に到達す。今社會の要素及規定に物的なるあり心的なるあり、以て成る。社會の動因に亦物的なるあり心的なるあり、以て成る。社會現象は斯に四類の分別を推想せしむ。物的要素及規定に物的動因の協作するに由る社會現象、其一なり、物的要素及規定に心的動因の協作するに由る社會現象、其二なり、心的要素及規定に物的動因の協作するに由る社會現象、其三なり、心的要素及規定に心的動因の協作するに由る社會現象、其四なり。今這般四類の社會現象について、其性質効果を吟味すること左の如し。

第一類の社會現象は純然たる物的現象なり、即ち唯物的現象なり、唯物的現象の世界は、唯あるとあるのみ、其變遷進動は悉く物的機制により、悉く勢の所業たり、特に論明の要を見ず。

唯總じて社會現象と謂ふ所の者の中、斯かる純然たる物的現象は、是は少しく奇異の感ありとすべきも、是れ實に日常人の許認し措定して覺知せざる所に屬す。最も顯著なる例を挙げむか、古來の歴史、往地大震、河水大漲、日有食之、彗星見等の語句あり、若し其社會現象の一たるに非ずんば、史家は全然之を録するの要なかるべきにあらざるや。

第二類の社會現象は、物的要素及規定に心的動因の協

作の效果にして、社會現象の重要なる部類を成す。是等は到底物的理法と背離するを容さざるも、而も物的理法と協合する範圍内に於いて意識的自由の作業を容るべき餘地は充分に存す。斯かる社會現象は、抽象の部局、範疇の差によりて、或は物的理法を以て擬す可く、或は心的理法を以て擬すべく、而して其具象的實在に於いては即ち亦物亦心的理法の司配の下に在る者なり。

例へば舟を行るが如し、舟の運動は悉く物的理法の司配以内に存する所の現象なるも、運動を決定するは舟子の意識的自由なり、かくて舟は實際に此二者の協合作業に由りて其運動を決定實現す。凡そ土木の經營工作、治水溝渠等、百般の經濟的作業、多く皆此類の社會現象たり。

第三類の社會現象は、心的要素及規定に物的動因の協

四〇
本書第二章社會理學
第一節第一章殊に其
第四節物心論參看。

作の效果にして、第二類に次いで社會現象の重要なる部類を成す。是等は心的理法の素地に向うて物的理法の影響を及ぼす者なり。蓋し既に詳明せる如く、心は究竟物を離れて存することなし、乃ち既に存在を得たる以上、心には意識的自由あるも、心の存在其者は物の存在に規定せらる、此關係に於いて物的動因は心的要素及規定と協作するを能くす。亦これ具象的實在に於いては、亦物亦心的理法を以て目すべき者の司配に屬す。

例へば高山に登るが如し、空氣の變動、植物帶の異動は、人の生活、氣分に影響す。斯かる影響を受けたる範圍内に於いて意識的自由は依然保持せらるるも、此影響は避け難き事實なり。氣候の犯罪に影響し、宗教に影響するが如き、其尤も顯著なる實例なりとす。

第四類の社會現象は、心的要素及規定に心的動因の協

作の効果にして、即ち純然たる心的現象、唯心的現象なり。其變遷進動は悉く心的機制に由り、悉く自由界の現象にして、理の純然たる司配の外、復勢の司配なる者を見ず。然れども如上は是れ抽象の言議にして、具象的實在界にては斯くいふ可き者唯個人心内の現象に止まる、社會現象に在りて、二個以上の人の心に存する此類の現象は、必ず少くとも人の身を通し、身の規定を通じて作業せざる能はざるを以て、社會に於ける心的機制は純然たる自由界の現象と做す可からず。此規定に關する理法は、此類の現象に於ける必然的理法、説明的物的理法を形成す、則ち此必然的理法の規定の免れ難きありと雖も、是れ第四類社會現象の變態の部分に局し、此類の現象の本質は依然として心的理法の規定に據りて存する者とす。

例へば相談を爲すが如し、意見の交換合意は言語の媒介を要し、乃ち身の關涉を要して、その規定を受くるの避け難きを致す。電話にて相談する場合には、此事一層顯著なり、電話機の不完其他の規定避くるに由なし。演説、講話、講義の如き、皆是れ第四類社會現象の單純なる實例なり。

斯の如く四類の複雑なる現象の總束を以て、社會進化は乃ち成る。要素、規定、及動因、皆是れ社會分内の事項に外ならず、社會進化は社會の自動にして、而して或は説明的、或は規範的、或は物的、或は心的、各種活動の連續を現する者に外ならず。是故に社會の進化は、全然精確なる測定を豫告し得べき者あり、又全然豫告測定の範圍到達の外に在る者あり。是に於いて、其心的要素は如何なる形象にて

作業するか、物的要素は如何にして心的要素の作業を受容するかの問題起る、是を理勢の範疇及相關の問題と爲す。

社會進化を以て唯物的现象とする者は、第一類の社會現象を見て其他を見ざる者、若くは其他を見るも其異同を解せざる者なり。社會進化を以て唯心的現象とする者は、第四類の社會現象に關して、其過誤や正に相若く、此二者の齟齬は今詳論せずして可。近時社會心理學の研究や、第四類の社會現象に就いて、衆個人の心の聚合より社會心意及行爲の生成に關する現定を研究して、此類の社會現象の性質理法、就中其説明的理法を講明するの功なきにあらず、而も若し之を以て或る唯一の社會進化の理法と做し、若くは社會進化の理法を以て心理的理法に限ると爲し、乃ち或は實驗心理學派の如く物心の相關に於ける實驗的理法に限ると爲し、若くは合理心理學派の如く意識的自由に本づける形而上的理法に限ると爲すが如きは、皆社會進化

の要義を誤まり、其討索の方法を失へる者と謂はざる可からず。

抑、本節講ずる所は、極めて抽象の言議なるが、是れ將た社會進化の要義に就いて其大體の性質の決定の爲に己むを得ざる所なるのみ。

第四節 理勢の範疇及相關

社會進化、既に單純なる物的若くは心的現象にあらず、而も複雑なる自動的現象なるを知れば、社會進化の原因を社會の外に求むるの要なきは明なり。社會進化は社會分内の事なり、其物的要素は究竟機制的變動を効果し、其心的要素は究竟自由的變動を効果し、兩者四類の社會現象に相抱合して、社會の變遷進動乃ち成る。機制的變動は見在的變動を意味す、其去來や勢なり。自由的變動は理想

的變動を意味す、其決定や理に本づく。社會進化は、四類の現象に於ける理勢の協合作業に外ならず。

第一類の社會現象に在りては、其制約や悉く機制的なり、乃ち唯勢の作業たり。第四類の社會現象に在りては、其制約や悉く自由的なり、乃ち唯理の作業たり。第二類及第三類に在りて、勢と理とは相抱合して乃ち現象を効果す。抑、社會現象は、其具象的複雑なる實地より見れば、是等四類の現象が交互に錯雜に共存及繼起して、因縁の關係に於いて相連續する一系に外ならざるが故に、社會現象の連續即ち社會進化は、畢竟理勢の協合作業に外ならざるなり。

社會進化に於ける勢の本據は、社會の物的素地に繋り

の學問界、精密に此に該當する者あらざり、已むなく人ばIdealist及Actualistの觀念を以て此に充てむり、而も理は更に實質的にReasonの義を含むこと切に、勢は更に動學的にTendencyの語義を含むこと強し、この困難なり。

て存し、其理の本據は、社會の心的素地に繋りて存す。社會の物的素地は、具象的實在にては、天然、是なり。社會の心的素地は、具象的實在にては、人、是なり。社會進化は、天然分内の機制的制約、若くは人心分内の自由制約、若くは天然の機制的制約に協合する分内に於ける人の自由選擇の決定、若くは人の自由的制約の素地に於ける天然の機制的影響、四者の同時若くは異時の作業に由る現象に外ならず、是故に社會進化の現象に於ける理勢の相關は、之を有機界の衆個體の運営に比觀すれば、最も人の運営に類似する者と謂ふべく、毫も之を以て無機界個物の存在に比すべきの形若くは理あるなし。

社會進化の具象的實地に在りて、究竟の決定者は理想

一、舟部の例示せむに、
二、舟の地盤に存するの
三、舟の構造に於ける
四、舟の航行に必要なる
五、舟の航行に必要なる
六、舟の航行に必要なる
七、舟の航行に必要なる
八、舟の航行に必要なる
九、舟の航行に必要なる
十、舟の航行に必要なる

に外ならざる者多きも、而も理想即ち理の作業を抽象し去り、其殘廓に就いて見るときは、亦純然たる機制的制約の一系として社會進化の現象は取扱はれ得るを知るべし。社會進化論に於ける機制的理法の取扱は、即ち此殘廓に於ける理法に外ならずして、通常社會進化の理法と稱する者は即ち此に外ならず。斯かる社會進化の理法が、其實、宇宙進化の最高の一大段節としての社會進化の實地的理法の全體に非ざること、明白なり。

社會現象は體制及運営に存す。社會進化は、全體としての變遷進動と、體制及運営の個個に於ける變遷進動との兩面を意味す。社會進化の事實的主腦たる理想は、社會心意に於ける者、及其成分として個人心意に於ける者の兩

面を意味す。

殘廓に於ける機制的理法の取扱と、純然たる理想其者の取扱とに分ちて、渾然として複雑なる社會進化の大現象を取扱ふこと、即ち一面には純勢の取扱を成し、一面には純理の取扱を成すは、講學上大なる利便と謂ふべし。社會進化の大現象の取扱は即ち社會動學の事項を成す、就中純勢の取扱は社會進化論を成し、純理の取扱は社會理想論を成す。社會進化の取扱に於ける理勢の觀念は、正に範疇として了得せらるべき者なり。

社會進化に關して、單に其機制的理法を求むれば則ち足れりとする、又單に其理想の促急なる樹立に達すれば能事畢るとすると、兩者の共に過てること、茲に明白なりと謂ふ可し。蓋し近時科學的研究の聲盛に起り、其義解の一として、科學の目的は説明にあり、其事業は

機制的理法の尋釋に在りとするの見地より、人間社會の現象の取扱に至るまで、學問の造詣は單に斯の如きに止まりて能事乃ち畢るとするの謬見あり、フエバンクス、バスコム、ギンセント、スモオル等、米國新進の學者に最も多く見る所、ジンメル、ワルムス等、佛獨の現代學者も亦頗る這般の傾向を脱せざる者に似たり、之に反對して他方の極弊は、學問の究竟が理想の樹立に在りといふを固執し、而も社會理想の社會的機制との關係を吟味することなく、乃ち亦社會的機制其者を吟味するの要を認むることなく、直に理想の樹立に向うて幕進するを以て學問の責乃ち全しと做すもの、所謂哲學者流の名目を科學者流より蒙れる學者に多く見る所にして、斯くして樹立せる理想や、未だ以て學問上の價值と效力とを有するに足らざるものなり、彼宗教より來たる社會學者流は、今日に於いて最も多く此非難を受くべき者、其他既定假設の政治論、經濟論、獨斷的法理論等の上に立ちて社會進化の理想を唱道する者皆此過誤を冒す、不完全歸納法より一二の國家社會に於ける某々制度の變遷を以て直に該制度進化の普遍

的理法に擬せむとするが如き、亦同種の過誤に陥れる者、メインの如き、亦殆ど免れず、後のメインを祖述する輩、最も猛省を要する所とす、歐洲に在りし、英國の經濟進化論が、從來特に英國の事實的經過、英國流の偏癖を是認するに傾き、獨逸の政治進化論が、特に獨逸主義の小圈裏に局限し、歐米、就中歐洲の宗教進化論が、特に基督教を以て結局とするの陋態、演出せるは、觀察の廣濶にして、識見の透徹する識者の、治く擧感する所たり、理想の談實に容易ならず、理想を運用するの行徑たる社會進化の機制を顧ずんば、理想既に正大にして、的確なるも、亦立つあらむこと難し。

第五節 社會進化の理法の觀念

複雑なる社會進化の觀念、上述二節を以て粗、得るありとすべし。今之を結束して、社會進化の理法の觀念を與へむとす。

社會進化の具象的理法は、社會進化の實地的解釋を與ふる者にして、理想即ち自由的決定と、趨勢即ち機制的制約とを包含して、乃ち成る。

社會進化の抽象的理法は、社會進化に於ける機制的制約を抽象せる者にして、自由的決定の理想が實施運行すべき徑路を説明す。

かかる徑路の説明は即ち次章の企つる所とす。抽象的理法には毫も規範的意義あるなし。進化に於ける優劣の義は、全く純ら理想に繋りて存す。彼の史的發現成立の前後の如き、若くは存廢勝敗の如き、斷じて單に以て社會若くは社會制度の優劣を斷ずるの根據と爲す。可きに非ず。是れ最も注意を要する所なり。

第二章 社會進化の方式

第一節 汎論

社會進化の方式は、進化の理法が社會各般の事象に流形する形相を明にす。社會進化の理法は畢竟宇宙進化の大理法の社會に於ける特殊なる顯現に外ならずして、その社會の事象に流形するや、小にしては社會の制度即ち體制及運營の各個に於いてし、乃至要素規定等の各個に於いて亦之を見、大にしては各個の社會全體の進化に於いてす。

易乾の象に品物流形
の語ありの今理法の
宇宙各種の現象に流
形するに對して暫く現
の目に下す。

社會進化は、宇宙進化の最も複雑なるものにして、三段二類の進化の理法は悉く此に於いて流形す。三段とは何ぞや、天體的、生物的、及社會的、是なり。二類とは何ぞや、増進的、及減退的、是なり。乃ち此三段二類によりて、進化の理法凡そ六、加速度の理法其一なり、遺傳の理法其二なり、度制の理法其三なり、以上を増進的進化の理法と爲す、自然淘汰の理法其四なり、意識的淘汰の理法其五なり、理想的淘汰の理法其六なり、以上を減退的進化の理法と爲す。就中、増進的なる度制の理法、減退的なる理想的淘汰の理法を以て、社會進化に特有なりとするも、這般六種の理法皆社會進化に於いて流形す。

社會進化に於ける進化の理法を以て、天體進化若くは生物進化に

於ける進化の理法と、全然同一なりと做す者あり、又全然別異なりと做す者あり、全然同一なりと做す者は、社會進化の物的要素を顧て其心的要素を藐視する者、若くは全く兩般要素の關係及效果の吟味を懈る者なり、全然別異なりと做す者は、社會進化の心的要素を顧て其物的要素を藐視する者、若くは全く理勢の範疇及相關の吟味を懈る者なり、蓋し近時進化の觀念、生物學に起りて、星學及社會學の二方向に擴がる、類推擴衍を急ぐの餘、仔細なる吟味を遂ぐるを懈るは、往往免るるに難き弊竇なるも、學問の進歩は、早晚斯かる過誤を擺脫せざる可からず、是れ六種理法の説ある所以なり、唯物的社會學者は、知らず識らず生物進化を以て社會進化を律するの過誤を冒す、殊に知らず生物進化其者亦實に天體進化を以て律せらる可きに非ざるを、社會進化に於いて理の力を打建ててひとする者、理想の效力を樹立せむと擬する者は、亦反對の過誤に陥り、社會進化の物的規定をば一概に排斥し、其極竟に進化の理法其者をも排斥し去らむと擬す、蓋し進化の理法や、其因縁生物界の攻究に本づける者なれば、論者が進化の理

六種の進化の根本的理法
二種の社會的進化の根本的理法
は、本著第二卷の社會動學
の第二章に於いて詳述す
すべし

複因の關係は、單純なる因果の關係を推定するを難くすればなり。

生存競争、適者存立、優勝劣敗の名號題目、生物進化の研究者に起り、スペンサルSpencerによりて一般進化に擴げられ、以て進化論の全幅真髓を
表言する者として、世に行はるること久し、然るも其眞義に至りては
茫乎、紛然、或は蒙昧に附し、或は混亂を累ぬ、進化論を難ずるもの、進化
論に贊するもの、亦毎に此龐雜なる根柢に坐す、進化の實理的見解を
立するもの尤も先づ本文所説の洞開より手を下すを要す。

Spencer: First Principles of the Knowledge of Life.

社會進化の方式に於いては、進化の抽象的理法が眞に社會進化の理法として効力を有する所以を樹立するを以て能事と爲す。

今進化と進歩との關係を論じて以て進化の直義を了會するに資すべし。

Evolution. Transformation. Progress.

進化の語は變遷Evolutionの義と進歩の義とを兼有す。古希臘の哲學、支那古來の教學に於ける進化の觀念は、正に斯の如き者なりき。近時生物學上の大發明によりて、進化の語義は新なる生氣を得たるも、猶適種存立優勝劣敗といふ事が、生物學上には完全なる眞理たるを失はざる以上、進化の語は毎に唯斯かる意義に於いて通用せり。然るに、此語の一方には天體現象に適用せられ、他方には社會現象に適用せらるるに迫ひて、進化といふことは頗る奇異なる名辭となれり。抑、天體に於いて、太陽が光熱を放射し、冷却を表面に生じ、凝固せる地皮の上に、參差たる山川草木を現し、遂に動物、人類を現する、一聯の大過程、尙或は之を進歩と稱するを得可しとするも、地球の内部が更に冷却固結し、大なる地震と噴火とを経て、巨大なる噴火口と乾燥せる海底とを名残りなる月球の状態に立至るは、果して何等の進歩ぞや。社會に於いて、弱の肉は強の食となり、希臘羅馬の文明社會一旦に敗滅して、中世の暗黒時代Dark Agesを現せる、果して何の進歩ぞや。蓋し進化の語は、實に進歩と變遷との二義を兼有するが、之を何等の意識的實在なく、何等の理

近時宗教の御利益を
行商するもの往往々
に中世社會の謳歌に

の此要素の上に建つあり、社會の動因として種族保存及び發達の動機の如き純ら人の生物的性質の上に建つあり。凡そ是等、人の身及心に關する性質屬性の存在、繼續、進歩、變遷は、皆遺傳の理法の流形に關らざる者なし。一般生物界に於けるが如く、人間亦此理法の作業によりて、個人が時間の無限界に生滅窮なきに拘らず、渾一體としての成立變遷を遂ぐるを得、乃ち以て種族の存立を成し、以て社會構成の自然的素地を成す。

遺傳の理法の社會進化に於ける、其人に關する者は、個人心身の屬性の存立及發達に於いてする者を主とし、直接社會其者の渾一體に於いてせざるも、而も社會は人を以て成分と爲し、人を離れて社會なく、且人は社會の全部

に充實するが故に、此理法の社會に於けるは徧滿にして、且此理法の流形より社會成分の屬性の統一及殊別の異同關係を生ず。原本を個人性に有せる屬性の遺傳は、やがて種族の屬性の遺傳となり、以て社會の屬性の恒存となる。斯くて遺傳は、其效果に於いては、社會其者に關する者とまで進行す、遺傳は種族を社會の規定たらしむる要因たり。

人に於ける遺傳は、社會進化に於ける遺傳の理法の最も主要なる流形なるが、社會の要素規定及動因としての自然界にも、亦生物遺傳の事象あり、其流形に由りて社會進化を輔成す。

遺傳の理法は、斯く社會の理學的根基に流形し、隨うて

亦其靜學的事項に流形すること尠からず。就中、社會體制に在りては家族の存立及發達に於いて、社會運営にありては教育の開展及成立に於いて、此理法の規定は大にして且著し。教育は此理法なしには殆ど發達を失し、家族は此理法なしには殆ど自然の精神的渾一性を喪ふ。但し此理法は、制度の存滅には直接の關係なし、制度の存滅を司配する者は寧ろ度制の理法なり。

遺傳の理法の效果は、社會に存する生物的屬性をして限なく發達せしむるの傾向を生成すること、是なり。種族の特性は、其品質の如何に拘らず、此理法に由りて際限なく發達するの傾向を有す。故に此理法は、一方には衆種族の共通屬性を洽く開展すると共に、一方には各種族の特

性偏癖を際限なく開展して、種族の區別を増進するの效果あり。隨うて社會にも亦衆社會に共通なる屬性を開展すると共に、各社會の特性を益發揮して衆社會の分立對峙を増進するの傾向を成すものとす。

遺傳の理法は、其初、生物界の理法として發見せられ、人間にも亦其適用を見るに及びて、其人間の説明に貢獻する所少からざりしも、社會進化に於ける其流形は、未だ充分に著目せられず、隨ひて種族と社會との關係も、社會學上尙未だ藐視の境界を免るるに至らざりき。蓋し社會進化に關する從來學者の攻究は、兎角に大體論に傾き、總括的一括的研究に偏して、分析的研究は甚だ起らず、輒近社會進化に於ける心的要素などいへる研究の起れるに由りて、僅に其端緒を啓ける者。若し此分析的研究を用るば、社會進化に於ける遺傳の理法は、其加速度の理法と共に、容易に學者の研究に上るべき者たり。今や本著の體貌は、細密に此問題に立入るを容さず、唯全體的研究の方式及結果

14
Gustave Le Bon :
Lois psychologiques
de l'évolution du
Tempo, L. F. Ward :
Psychic Factors of
Civilization. の如き
その一例なるが、如き
この心理的研究が、社
會の進化的研究に注
意を惹きたる新光明
として視すべし。

を敘述するに止むるのみ。

第四節 社會進化に於ける

度制の理法

社會進化に於ける増進的理法は、加速度の理法及遺傳の理法を従とし、度制の理法を主とす。度制の理法は社會進化の段節ならでは之なき者なれば、特に社會進化に於ける度制の理法として云云するの要なく、又曩に宇宙進化の六大理法として此理法について述べたる所は、即ち此理法の全幅に外ならず。

度制は種族の觀念を社會の觀念より區別するの要諦なり。人は、遺傳の理法に由りて、一般生物と同じく個體的

本書第一六
第二章第六節
参照。

一七
社會的意識及社會的
行爲は之を社會心
意及社會行爲と改稱す
るを佳とす。

存在より進みて種族的存在を得、度制の理法によりて更に社會的存在たるを得。社會的存在には社會心意あり社會行爲あり。社會心意は社會の體制を介して各般の社會行爲を成す、社會の體制及其運營の聚合は即ち社會の制度にして、社會の行爲を成す所以の根據なり。社會行爲は社會の制度より出で、却りて還た制度を促進す。今詳に之を見るに、社會の制度は行爲を成し、行爲は社會の發達を促し、社會の發達は更に制度を開展す。凡そ社會に於ける行爲因縁の寄託は皆制度に於いて藏せらる。社會の變遷は乃ち制度の變遷及社會活力の變遷に外ならず、就中社會活力の變遷は、單純なる加速度の理法に隨ひ、制度の變遷は即ち度制の理法に隨ふ。度制の理法は、遺傳の理法と

同じく、之を加速度の理法の特殊的流形と看做し得ざるに非ず、而も加速度の理法は純然機制的理法なるに、他の二は然らざるを以て、寧ろ宇宙進化の増進的理法が次第に三様の流形を成せる者と解するを穩當なりとす。

度制の理法は、あらゆる社會制度の生成に於いて見はれ、亦其發達開展に於いて見はる。制度は判明に進み、運営は制度と共に分化し、各種制度の體系は益々統整に赴く。社會行爲は、一面には社會の外に向うての作業たると同時に、一面には必ず社會の内に向うて其制度の開展發達を作成す。制度の發達は、制度の判明に赴き、其運営の效果の増進するなり。制度の開展は、運営の效果の増進の結果、分化を生じて、且つ斯く分化に分化を重ねたるが更に全體

系の統整を成すなり。社會各般の制度は、斯くして限無く發達開展し、社會行爲の連續に由り、換言すれば社會の存立の連續に由りて、社會の制度的進化は恒久に繼續するの傾向を有す。度制的進化は實に社會に特有なる増進的進化なり。

凡そ家族、市府、國家、國際の體制、經濟、教化、政治の運営、大小各種の款項節目、皆此理法に率うて増進的進化を成す。遺傳の理法は縦の増進なり、度制の理法は横の増進を効果すと謂ふ可し。度制の理法に由りて社會の直接なる増進的進化は悉く行はる。

度制の理法の効果は、各個社會をして際限なく對峙發達せしめ、社會の各個制度をして際限なく分化統整せし

を生ずることなしとせず、理想の實現を以て社會の理想
的進化を現せむが爲には、往往自然淘汰に抗敵して一種
の淘汰を行ひ成すの要あり。斯かる一種の淘汰は即ち理
想的淘汰なり。

從來の學者は、往往理想的淘汰あるを忘れ、凡そ事象の成りたる後
に就いて一偏の皮相的觀察を爲し、存在を失却せる者を劣者と名づ
け、残りて存在する者を以て優者なりとし、斯くなり行ける事象に名
づけて皆之を自然淘汰と汎稱す、而して特に知らず、此優存劣滅は時
として自然的物的の優劣の間に自然淘汰の行はれたる結果なるも、
時として、殊に人間界の事象に在りては、最も屢、寧ろ理想的優者劣者
の間に理想的淘汰の行ひ遂げられたるの結果なることを、之を例せ
むに、庭園に於いて自然的に最も繁殖生長の強くして速なるは惡草
狼莠なり、花卉草本は到底これに壓倒せらるるの自然的命運なるを、
園丁の理想的淘汰によりて、惡草狼莠は芟除せられ、美花芳草の茲に

110 G. de Greef, Le
Transformisme Soci-
al, 1895, が社會上
Selection naturelle et
Selection artificielle
の區別を成せるは取
るべきも所説徹底な
缺く。

111 巴里人類學校教授
Bouvier は夙に機
體を變態し社會有
じ自然法に對する論
得るは、自然法に對
不可論に對する論
不可論に對する論
不可論に對する論
不可論に對する論
(La Vie de Societe,
1887)

繁り行くを見るなり、歐人は亞人の繁殖を以て自個民族の發達を害
する者と思ひ、黃人は白人の跋扈を以て自個の生存を危くする者と
爲す。若し自然淘汰に任せむか、兩者の所見孰れか一は誤ならざる可
からず、而も理想的淘汰は、兩者の共に勵精し、其最高の努力、最善の自
個實現を以て競争するを必要とするなり、是故に社會の事象、自然淘
汰の理法の流形は事實なるも、直に自然淘汰を以て抗敵す可からざ
る者と爲して放任するを眞理と誤想す可きにあらず。

社會に於ける自然淘汰を各種の社會事象について立
證するは蛇足に屬す。同一社會の内に在りて、限有る生活
の費用を以てするとき、個人の間には優勝劣敗あること、個
人の屬性の内に在りて、状態の抵抗より相兩立し難き屬
性の間に優勝劣敗あること、社會制度の間にも、二個以上
の制度が同一範疇に屬するとき、若くは相異なる範疇に

112 歐人の「黃人」なる
至語近野心的帝王
政治家等の好みて用
ゐる所、而して學者
亦屢爲に辯を費す
NOVICOW: L'Avenir
de la Race blanche
の如きは、大に歐人を
慰藉せむと擬す。

113 本書第二卷社會理學
第二篇第二章第三節
參照。

屬して相背違する性質を有するときは、其間に優勝劣敗あること、更に二個以上の社會が、限有る人口、限有る土地の舞臺の上に其存立及發達を遂げむとするときは、早晩競争の實を現して、其間優勝劣敗の行はるること、等は、今重ねて言ふまでもなし。唯純然たる人的現象、及社會制度の人的現象に在りては、自然的の優劣、適不適を超絶する者亦尠ならずして、是等は自然淘汰の理法の流形の外に在り、其淘汰は必ず他の減退的理法を須つ者なり、是れ最も注意す可き事に屬す。是故に、抽象的理法として自然淘汰の流形は大なる事實なるも、實地に於いて社會事象の存滅が自然淘汰に由ることは寧ろ罕觀の事なりとす、此事、社會の進み、人意事象の擴まるに隨ひ、益著しきを加ふ。

本書第二卷社會學
第二章第一節大註參照

進化の理法といへば減退的理法なりと以爲ひ、又更に就中自然淘汰の理法なりと以爲ふは、誠に謂れなき俗見なりと謂ふべし。此俗見の爲に、社會には進化の理法なしとする説と、社會は唯自然淘汰を以て變遷すとする説とを生ぜり、二説の共に正當なる社會動學的見地の生成を妨ぐるは、言ふまでもなし。

自然淘汰は、かく抽象的理法としてののみ其必然的効力を有するが故に、社會の變遷發達に向うて人爲の干涉を拒否するの謂れなきは、當然なり。唯純然たる物的事象に在りては、自然淘汰は抽象的なると同時に具象的理法の効力を有するを以て、全く人爲の干涉を超絶し、干涉の以て之に擬す可きなし。唯夫れ苟くも干涉の擬せらる可き一切の事象は、斷然自然淘汰に放任せらる可きに非ざる者、而して社會事象に在りて社會運營社會行爲の對象た

る事物は悉く此類に爲す。是故に自然淘汰の理法は、社會の變遷に於ける一の説明的理法に外ならず、唯是れ社會の變遷發達に於ける一個の因子として擧ぐるを要するに過ぎざる者なり。且進化的の本義、即ち進歩ある變遷としては、既に物的段節を超え來たる社會に關して、自然淘汰を以て進化と爲すべきにあらず、純然たる自然淘汰の効果は、以て物的優者の勝利と謂ふ可きも、以て社會的優者の勝利と謂ふ可からざればなり。

社會の天然的要素、規定、及動因に對し、變態的理法二五として自然淘汰の理法の流形あるは、固より然り。唯是等は個個として斯かる規定を受くるも、制度之を大にして各個の社會に於いては、既に社會的人的性質の中に其天然的

1194
Mandatory Law.

物的性質を没し了す。二六

言語の自然淘汰、宗教の自然淘汰、經濟の自然淘汰等の語は、人の屢半解の論客より聞く所なり。謂ふ言語の優者は存し、劣者は滅するの運命は避く可からずと、夫の宗教、夫の經濟に關するも、亦復斯の如し。抑、言語其他に於いて所謂優劣とは何を謂ふか、必ず其存滅の判明を須ちて、存せる者を優者とし、滅せる者を劣者とすといふか、則ち優劣は無意味の語のみ。若し或は優劣は之を判ずるの標準ありとするも、劣れる言語は進歩する能はず、劣れる宗教、經濟は改良する能はずと斷じ得るか、蓋し不可能なるべし。進歩改良を成せるの時、夫の優者に没入せるの時なりと妄言し得るか、梅の美は櫻の美と相契合せしむべしと謂ふか。

蓋し自然淘汰の理法の實地的價值は、若し人爲の干涉を懈怠するあるとき、眞の優者は其まゝにて勝存し、眞の劣者は其まゝにて劣滅すといふに過ぎざるなり。半解の徒乃ち誤まりて人爲の干涉の以て加ふべきなく、則ち加ふるも亦到底無効に了るべきの宣言と見做す。

二六
Johann R. Mucke;
Horde n. Familie
etc. 1896. S. 10-11.
社會進化に於ける心
身の關係の見、殆ど
予の説に合す。

自然淘汰の社會に於けるは、亦唯變態的理法たるに過ぎずして、加速度の理法の流形が際限なく社會の成分、部分、衆多等を増進しつゝ行くに對し、淘汰を加へて、量的増進を、幾分か質的進歩の方に、轉向するの効果を成す。

第三節 社會進化に於ける

意識的淘汰の理法

意識的淘汰の減退的理法は、之と相對する増進的理法たる遺傳の理法と同じく、社會進化に於いては本來間接の作業を成す。

意識的淘汰は生物的淘汰なり。社會の要素、規定、及動因

に在りて、人の生物的性質、及天然の生物界、是等二面に亘りて、此生物的淘汰の理法は流形す。但し其人に於けるや、遺傳の増進的理法に對して減退的變態的理法たりといふのみにして、其流形の範圍は甚だ狹隘なり。蓋し一般に宇宙進化に在りても、此理法は甚だ廣き流形の範域を有せず、殊に人に在りて單純なる意識的淘汰は甚だ罕にして、多くは直に理想的淘汰とまで進むものなり。

意識的淘汰は、社會の體制及運營の各項、即ち制度の存滅の上に作業することなし。但し社會の心意よりいへば、制度を化醇するの意識的淘汰なきにあらず、是れ社會に於ける生存上の意識的淘汰なり、而も此場合にも、個人心意よりして之を見れば、既に意識よりも寧ろ理想に進め

るが故に、生物についていひ、若くは遺傳についていへるが如き、意識的といふ語の直接なる意味に於いて意識的淘汰は社會に行はるとは言ひ難し。若し夫れ生殖上の意識的淘汰即ち所謂雌雄淘汰は、直接には全然社會の闕如する所たり。

實地上、具象的見地よりいへば、間接の作業の外、意識的淘汰の社會に於けるは理想的淘汰の不判明なる者と謂ふを妨げず。間接作業に在りても、人は生物意識の開展して既に思想の時期まで進める者なれば、單純なる意識的作用は、其心の作用に於いて比較的小部分を占むるのみ、理想的判斷に本づける心的作用を多しとす。されば又蠻民の心理に於いては、單純なる意識的作用も少からず、隨

うて原始社會の研究に於いては、意識的淘汰の間接に社會進化に作業せること少からざるを看る。例せば遊牧部落が水草を逐うて轉徙するが如き、日月の蝕が蠻民の精神的檢束を促せるが如き、巫覡が司配的權力を獲るが如き、比比として擧ぐ可き者あり。

意識的淘汰は亦減退的理法なるが、必ずしも遺傳の効果を變態するを爲さず、一般に初等なる心的變態を社會の發達に加ふるの因子と爲る。

意識的淘汰は、其流形の範域の狭きが爲に、殊に從來自然淘汰の中に没却せらる。社會の取扱に於いては、殊に此弊を大なりとせり。社會について自然淘汰と意識的淘汰とを甄別するの必要は、純然たる自然淘汰は客觀界の事象に屬して毫も人心の因子を計量に加ふるの要なきも、意識的淘汰に在りては外界を感受する人間意識の明不明

判斷の適否等、人心の因子を計量に加ふるの要あるに在り。

第七節 社會進化に於ける

理想的淘汰の理法

増進的理法に於いて、度制が社會進化に特有なるが如く、減退的理法に於いて理想的淘汰は社會進化に特有なり、乃ち亦特に社會進化に於ける理想的淘汰と謂ふの要なく、曩に宇宙進化を概論するの際に之を解説せる所の者、今の解説として乃ち足る。

理想的淘汰は、自然淘汰の機制的淘汰に對し、意識的淘汰の所動的選擇に對し、積極的に心の判斷、人格の判斷の全副を以て淘汰を行ふ者。其方法、又次第に、緩あり急ある

も、要するに自然の趨向に逆ふ者、若くは自然の趨向の足らざるを補ふ者に外ならず。是故に理想的淘汰の方法は積極的殘害に於いてするを多しとす。

理想的淘汰の根本は、理想是なり。淘汰を行べき理想の干涉は、人力の干涉を超越する事象に就いては之有ることなし。夫の超國民的事項ニの如きは全く人力の干涉以上に互る者、理想の以て加ふ可きなし。社會及個人ニの行爲の分内の事象に在りては、各個皆理想の判斷を待つ。而して理想は自然及意識を支配し、自然の最上の判定者、執行者として、理想的淘汰乃ち行はる。

是に於いて、社會進化の究竟は、竟に社會理想に没入す。社會進化は、社會理想の解明を獲たる以上に非ざれば、僅

本書第二卷社會學
第四篇第一章第五節
三八五參照

に其形式的解釋を成せるに過ぎず。社會理想の止む可からざるは、是れ社會進化の理法の内容に於ける重要事項たり、社會の變遷が理に須つあるは、是れ社會變遷の勢なり、乃ち亦以て社會に於ける理勢の相關を明察す可し。

之を要するに、社會進化の方式は宇宙進化の六大理法に於いて存す、就中三項の増進的理法、二項の減退的理法は、必ずしも理想の内容を問ふことなく、各社會の進化に與かる所以の理法なるも、第六、減退的最終の理法に至りて、凡べて是等各般の理法を變態し規定するの大理法、其究竟實に理想に在ることを明にする者なり。社會進化論と社會理想論との相關不離、亦以て見るに足らむ。

理想的淘汰の理法は、社會進化の六大理法、六種方式の一として他

の五者と相駢立すとはいへど、自ら輕重の分あり、他に對して能規所規の別ありといふべし。而して從來の學者、往往此重要なる大問題を遺却す、人間の進化を説いて時に或は其退化を獎むるの陋に陥る者ありしは、怪むに足らざるなり。

社會進化の純粹理論は、要義及方式の二章に於いて悉きたるが、更に實質の一章を須ちて、進化の内容を總覽し、而して後社會理想の研究に進むべし。蓋し社會動學や固是れ體系的なる一篇の連續の議論、篇章節目の分別は其甚だ便とせざる所、貫通錯綜、前後相照すに於いて完體を看る、乃ち可。

第三章 社會進化の實質

第一節 緒言

社會進化の一般宇宙進化に於ける地位、及其顯現流形の方式は既に闡明を了せる所、乃ち其性質の一半、形式的原理は、粗、上來の設述を以て明了せる者と謂ふ可し。今社會進化の理論を完うせむには、更に其實質的原理について査究する所なかる可からず、是れ社會進化の内面的事項にして、特に社會自體について精査を要するもの、其關係は社會理想の吟味に聯り、而して其應用は文明の論究

に及ぶ。

抑、社會進化の理論は、社會講究の豫件となり、又其究竟となる。社會と宇宙萬有との關係を知らざれば、以て社會攻究の正鵠を射ること難し、乃ち豫件として此理論の要ある所以、既に社會の攻究に於いて其發生、體制、及運營を察し、及其之を指導する理想との相關を觀來りて、社會の觀念稍、精緻なるに至りては、茲に社會研究の究竟として社會進化を究明するを要す、而して此究明は、端を社會進化の實質に發き、社會理想の吟味に中し、文明の攷察を以て了る所の一系の議論に於いて成る者、乃ち社會學の主部を成す所の者なり。是故に原理原則の研究の社會進化の形式に於けるは、猶社會理想及文明の研究の社會進化の實質に於けるが如し、彼此兩者の後影を成す所以、而して社會進化の研究が社會學の緊節に中る所以なりとす。

スペンサル曰はく、吾人が吟味せる數多き事實は社會進化は一般進化の一部なるを證すと、蓋し社會進化を以て宇宙進化の一節と爲すこと、東洋に在りて、支那儒學の哲理、夙に之を講明し、歐西に在りて、

希臘二三の哲學者亦之を認むることを過たざりき。夫の此を以て全く彼と其性質を相異にし、其關係を相絶せる者と爲すが如きは、空想的宗教者流の迷妄に蔽はれたる、思想界一時の病的現象にして、必ずしも輓近自然科学の進歩を須つと謂はず、苟くも人間思想が其正徑を運行する時代に在りては、決して違ふ可からざるの眞理たるなり。但近世自然科学進歩の著大なるや、往往甲を以て乙を律し、乃ち自家唱説の髓腦たる進化論其者に撞着するの誤謬に陥りて自ら知らざるの弊なしとせず、講明の要ある所以なり。

社會進化論は、近世思想家より幾千の眷顧を蒙れるに拘らず、其研究の未だ遑遑の態を免れざるが爲に、茲には其些少なる學者の研究を一瞥するを要す。這般の學者が、何れも有數の傑才なることは、斯かる状態の研究に於いて毎に見る所、是れ學徒の與會を有する所とす。生物學的進化より進みて社會的進化に至る、其著明なる進化の特質を掲ぐるに於いて、諸家多少の異見あるを免れず。蓋し近世人間社會の進歩について其哲理的概括的講明を試みたるは、ヘーゲルの歴

史哲學を以て一期限を劃すと謂ふ可し。ヘーゲルは、自個實現の進歩即ち是れ人間社會の進歩なりとし、自覺益、進み、自制愈、進みて、而して人間自由の範域次第に擴がり、乃ち文明の進歩を見ると謂へり。是に於いて東方文明を第一期とし、希臘文明を第二期とし、日耳曼文明を其第三期とす。其第一期に在りては、宇宙間絶對無限の自由を有する者唯一人あるのみ、天に於ける上帝、地に於ける帝王是なり。第二期に在りては、人間自由を有する者其一部に限る、是故に希臘羅馬の社會には奴隸の存在を必要とす、而して更に自由の實體を成形的法律に制定表現せる者を羅馬と爲す。既にして基督教起り、其勢力至大至廣にして、日耳曼民族の偉大なる發達の民性と駢行して、遂に人間全般天賦自由の大進歩を效果せる者、即ち第三期なりとす。是れヘーゲルが社會進化の特質及其開展の大勢と爲す所の者にして、稍、外形的に牽強の弊ありと雖も、人間資性の發達を約して自個實現に歸せる、着眼の精確や竟に没す可からず。

是より先佛國のルソオ、亦其有名なる社會契約論に於いて、社會の

本質は之を組成する各人間の契約に在りと爲す、其意蓋しアリスト
 テレエスが天然と謂ふが如く、子思中庸の性といふが如き意義にて、
 本性に於ける社會の特質を尋ねたる者にして、必ずしも社會組織の
 歴史的斷案として此説を提供せるに非ざるなり、即ち社會の本質は
 之を組成する各人の社會的自認に在りと謂ふに外ならず。

斯の如く這般佛獨兩個の學者は、共に社會の本質を斷ずるに於い
 て、生物學的進化とは大に相異なる新特質の社會學的進化に存する
 を唱説せりと雖も、之に伴ふ社會體制の進化の吟味に於いては、蓋し
 闕如の嘆なくんばならず、彼等は共に社會進化を以て人間主觀的の
 進動と看做せるの嫌ありしなり、乃ち是に次いで出でたるを社會學
 の鼻祖と稱せらるる佛國のオオギュスト・コムトと爲す、コムトは、社會
 進化の本質を以て道理の發達に歸し、而して更に其外形の發達を尋
 釋して三期の變遷ありと爲し、各これに神學的、形而上學的、及實理的
 の名稱を下せり、コムトがヘエゲルと同じく直に人間進化の本質に
 着眼せるは則ち大に可なるも、亦彼と同じく、猶未だ個人性より進み

コムトの實理哲學體
 系(一)八三〇—一八
 四二)はヘエゲルの
 歴史哲學(一八三八)
 と相前後して出た
 るもコムトの思想關
 の後には在り。

社會進化に關する問
 題の層々進歩し行く
 を明察すべし。行
 へエゲルが社會進化
 の問題に人間的變
 遷が新に社會外
 運に著目するに
 民族の佛獨兩族
 學者と社會學者
 學風との差異の
 徒として注目す
 學徒の注目を値す。

て社會結合性の本質を斷ずるに適切なる能はず、寧ろ此點に於いて
 はルッソオに比して退歩の憾なきを得ず、其社會外形の發達に於け
 る、着眼の斬新は則ち之を見るべきも、未だ組織の變遷、制度の發達を
 論じて的確なりとすべきにあらざり、社會進化の探究に於ける此個條
 は、則ち此に次いで第十九世紀後半に於ける斯學の泰斗と稱せらる
 るスペンサル其人を待たざる可からざりき。

スペンサルは、社會進化の本質に於いては、遂にアダム・スミスの説
 を祖述擴衍して之を同情の發達に本づけ、而して社會組織の進化を
 ば、軍隊的及產業的の二大期に劃せり、實驗哲學の驍將フィスク之を贊
 述し、社會組織の進化は、之を措きて復別種の説明あるなしやの感あ
 ること茲に二十年、近者米國のギッディングス乃ち之に基づきて更に詳
 明を加へたる説を出だせり、謂へらく、社會進化は、主觀的には道德的
 心靈的生活の擴衍なり、客觀的には道理の發展及同情の擴衍の效果
 として社會的關係組織の繁密を加ふる事に外ならず、之を要約すれ
 ば、社會の本質は同類意識の開展に外ならずと謂ふ可し、斯の如き社

John Fiske: Out-
 lines of Cosmic Phi-
 losophy, 2 vols.
 五 Franklin Gid-
 dings: Principles
 of Sociology.

會は、其組織に於いて亦三期の進化を成さざる可からず、第一期は軍隊的宗教的なり、第二期は自由的法制的なり、而して第三期は則ち經濟的道德的なりとす。是れギブディングスの新說にしてスペンサル、フィスクに比して一步を進めたりとすべきも、猶充分の精査を経るに非ざれば、未だ遽に其完全を認む可きに非ず。

今日に至るまで傑出せる學者が斯問題に關して成せる造詣は、粗斯の如きに過ぎず。今吾人が之を繼ぎて、更に一步を此方向に進めむとする、必ず先づ研究の範疇を定むるを要す、抑、社會進化の實質について研究を要する事項即ち研究問題は、上來觀來たる學者の着眼を參考し、合理的考察の結果に隨うて、左の四點に約す可き者とす。

第一、社會の成分に於ける進化の實質的原理。

第二、社會の結合性に於ける進化の實質的原理。

第三、社會の組織に於ける進化の實質的原理。

第四、社會の對關に於ける進化の實質的原理。

蓋し上來闡明せる所によりて、社會は其成分が結合性によりて組織

する所の者なることは明なり、成分は即ち人なり、結合性は個人と社會との關係の原理にして即ち社交性なり、組織は制度の體系にして體制及運営を併せて謂ふ、以上は社會の内部に於ける者、社會の外部に於ける者は即ち社會の對關を成す、此の四點に於ける進化の實質的原理を闡明せば、社會進化の實質は茲に明了すべし、今右の順序を逐うて考察に進まむとす。

第二節 思想の開展

社會の成分は即ち人なり。人其者は既に宇宙進化に於ける自然の連續的現象中に出現生成せる者にして、人の進化の觀察は必ず這般連續現象中に没すべし。

社會の成分に於ける進化の實質的原理の問題は更に三段より成る。一に思想の開展なり、二に性能の發達なり、三に人格の進歩なり。

六
拙著哲學大觀序說第
二之を詳説す

人に於いて特に著しき發達とし稱すべき者、身體の形狀あり、其内
部機關の運營あり、何れも多少の發達を爾他一般生物界の以上に效
果すと雖も、就中其最も著大にして明確なるは其心的現象に於ける
發達、即ち意識の發達、是なり。生物界に於ける、寧ろ宇宙進化に於ける、
意識の發達を約三期に區劃すれば、寫表の時期は全く人に屬せず、自
覺の時期より進みて思想の時期に至る者、是れ人間意識の開展の實
勢なり。乃ち社會の成分に於ける進化の實質的原理の探究は先づ人
間思想の開展より其考察を起さざる可からず。

思想の時期は、觀念の運用によりて自覺が活動的狀態
を取るに於いて、到來す。自覺は既に内外自地の關係に於
いて主客能所の關係を正せる者、即ち此に於ける觀念の
運用たる思想は、亦思想の主體の方面なる開展と、其客體
の方面なる開展との、二様の相を呈すべし。主觀的開展は

思想形式上の開展となり、客觀的開展は思想實質上の開
展となる。

七
常的又本然的開展は
各種複雜なる事情の
影響を受けざるに於
いて見らるべき開展
の徑路を意味す

思想實質上の常的開展は、之を三期に分つ可し、一に自
然觀察の時期、二に人間攷察の時期、三に宇宙攷察の時期、
是なり。自然觀察の時期は、専ら外世界の觀察に癖する者
にして、個體の所働的生存に應ずる者、哲學上の第一原理
に關しては唯物論此に應ず。人間攷察の時期は、専ら人間
の攷察に癖する者にして、個體の自覺的生存に應ずる者、
哲學上の第一原理に關しては唯心論此に應ず。宇宙攷察
の時期は、内外兩界に通じ、天然界及人界に通じ、徧く宇宙
の全般に即いて攷察を期する者にして、個體の思想的生
存に應ずる者、哲學上の第一原理に關しては合一論之に

應ず。此三種の開展に應ずる根本理想は、即ち逐次、依他主義、自依主義、及大觀主義なり。若し夫れ宗教的信仰の裏に就いて此思想開展三期の所應を求めむか、多神教、拜物教、祭天教は第一期に應じ、一神教は第二期、而して凡神教は第三期に應ずと謂ふ可し。

思想形式上の本然的開展は、亦之を三期に分つ、一に獨斷の時期、二に懷疑の時期、三に攷覈の時期、是なり。獨斷の時期は、是れ思想の幼稚單純なる運用に屬して、正に所働的思想と稱す可き者、外界の事物に就き、若くは他人の言説に就き、自個の思想見地を以て之を研覈吟味することなく、來る者をば輒ち以て正と爲し、眞と爲し、善と爲し、其間毫も疑念を挿むを爲さず、乃ち其知識に於けるや妄信

八
次篇第二章に詳なり

獨斷と爲り、其行事に於けるや模倣踏籍と爲る、是れ思想運用の最も初等なる者にして、正に外世界を主とするの思想に應ず。之に次いで來る者は即ち懷疑の時期にして、復是れ自働的思想に應ずる者なるが故に、率ね知識其者の成否如何の問題に限り、人の心的行動を對象とする討究に進み、第一期の妄信模倣より一反轉して無信無爲の境地に趁る。而も懷疑は到底人間思想永住の境地に非ず、其自個に於いて既に存立す可からざる破綻的因子を存す、乃ち更に一反轉を成すや、茲に所謂攷覈の時期なる者來る。此時期に於いては、思想家自個思想の運用其完全に達し、自個を空うして外物に接せず、成心を以て外事を視ず、思想の思想たる所以を悉して、必ず判斷を事物に試む、

是を以て其方法は批判的にして、其成果は眞正嚴密の意義に於ける折衷的なり、是れ實に合一論の取りて以て其體系を成すべき最良最好なる形式にして、洵に思想の思想を以て目すべき者、而して思想開展の形式は極まる。

斯く踪蹤せる人間思想開展の軌道は、固より常的本然的なる者を擧げたるなり、必ずしも實地常に然りとするに非ず、而も實地は亦大體に於いて之に協應するは勿論なり、吾曾て音響に於ける單音樂音を以て之に喩ふ、本然的軌道は單音波なり、實地軌道は樂音波なり、樂音波より單音波即ち主波を除去せる者、即ち副波は何ぞや、即ち第一的には社會の規定なり、第二的には思想の異同、即ち一に起點の異同、二に速度の異同、及三に徑路の異同によりて、思想徑行の規定、即ち是なり。

個人進化の實質の根本たる思想の開展は粗、斯の如し

此開展に應じて、社會の成分としての個人は如何に進化を成し行くか、次に之を稽查するを要す。

第三節 性能の發達

意識の開展は一般に生物をして初等より高等に進ましめ、思想の開展は人をして亦初等より高等に進ましむ。思想の開展は人の進化即ち進歩の根柢なり、此根柢の進歩に伴うて一般に人の具象的進歩を効果す、性能の開展即ち是なり。

人の性能の何たるかは既に見たる所、之を約すれば心身二面の現象を成す所以の賦性能力なり、之を開けば意識的行動及無意識的行動の能力なり。就中、意識的行動は

九
本書第二卷社會學
第一篇第二章參照。

即ち行爲を成す、無意識的行動は、直接に行爲に與らず、心の現象に直接には關係せざるも、所謂心身の一元二面的關係より間接には關係あり、身の現象たる無意識的行動は心の發動と相表裏し、彼此相應じて發達開展す。是故に人の進歩の要諦は、心的現象、即ち意識的行動、即ち行爲の進歩に在りとするも、其具象的考察に於ては、心身兩面の開展に外ならずとす。

今進みて性能の開展の要義を列記すること左の如し。
第一、身に屬する性能の開展。

甲、運動裝置の開展。此開展の要義は整齊及強力の増進に在り。整齊の増進は、裝置の各部が其職能に應じて過不及なき比例的發達を遂げ、其効果は、各部の間に或は相

殺或は過剩の力を生じて以て力の効果を無用に歸せしむることなきを致すに在り、是れ運動裝置の開展の第一諦なり。次には一般に強さ即ち力の増進することとなり、諸他の條件にして同一なるときは、強さの大なる者多くの効果を成すに幾きは、論なしとす、是れ第二諦なり。第一は性能の質に於ける開展、第二は量に於ける開展なり、兩者の間に強ひて輕重を立てむか、固より第一を重しとす可し。

乙、營養裝置の開展。此開展の要義は攝取及作用の増進に在り。攝取の増進といふは、如何なる外物外境よりも營養を攝取し得る能力の謂にして、即ち事境に耐ふるの性能是なり。次に作用の増進は量に於ける増進にして、榮

一〇
例ば不消化物、不
榮養物よりも尙よく
之を消化して自個榮
養の目的に適ふを得
るの類是なり。

養機關の強力の増進なり。此二類も、強ひて輕重せば、質の増進を以て量の増進より優れりとすべし。

丙、知覺裝置の開展。此開展は、一面、直に心的作用の開展を意味す、今純ら裝置の生理的方面より其開展を見れば、精密及敏捷の増進是なりとす。精密の増進とは、神經系統各部の作用益、么微と確實とを加ふるの謂、即ち質に於ける開展なり。敏捷の増進とは、知覺神經及運動神經に於ける作用の増進、即ち量に於ける開展なり。質に於ける開展は、一切の心理的開展に該當す、智能に在りて感覺より推度體系に至り、感性意志に在りて亦其各種の開展、皆個中に包含せらる。

丁、身的性能の全般に於ける開展。此開展は即ち調和

の發達なり。前三項は身的現象の各部に於いて見たる發達、即ち各部の内面的開展なり、今此項の開展は外面的開展にして、其相互關係の發達なり、此發達は約して調和の發達と爲すを以て事足れりとす。

第二、心に屬する性能の開展。

甲、智能の開展。智能は觀念の質及量に名づく、智能の開展は、感覺乃至推度體系の開展にして、各級の智能には各級の性質機能あるは心理學の明辨する所、智能の開展は即ち是等の開展なれども、之を約すれば、智能の機能及所得の増進なりと謂ふ可し。心理學が分析的説述を供する各級の智能各種の機能のそれぞれに發達するは固より智能の開展なり。之に伴うて各其所得の蓄積亦茲に増

進す、所得の増進は遠^又た機能の増進を促す、斯く兩者互に因縁を相成して、以て智能全般の發達を効果す。

乙、情性の開展。情性は感情即ち觀念の調子を以て主體とする心的作用の總稱なり。情性の開展は即ち感情の開展にして、之を順當及強度の増進に約す。順當の増進とは感情の快不快が人の本性に順當するの謂なり。順當の如何は、單純なる情性例へば感覺に於ける快不快については見易きも、複雑なる情性例へば道德的情緒については頗る判じ難し。強度の増進は感情の強さの發達の謂なり。此兩件を以て、情性は漸次完全に赴く。

丙、意志の開展。意志は觀念の刺戟的性質にして、最も身の開展と近密の關係ある心的現象なり。意志の開展は

前節にいへる思想の
一、開展は、これを抽象
し、其觀念本體の
開展たるについで立
言せるものなり。

最も單純なり、即ち唯其強度の發達を以て要義とす。或は選擇の順當を以て之に充てむと擬するも、こは人格に屬して意志に屬せず。

丁、心的現象の全般に於ける開展。心的現象の全般に於ける開展は、亦^又智情意の總束に於ける開展にして、即ち觀念現象の渾一的開展なり。一般に觀念活動の舞臺について、意識の開展と稱する者、是なり、又之を抽象的に各種の心的作用について察すれば、智能情性及意志の三者の各個の間に於ける調和協合の増進、是なり。抑、此三者の區別は、實は抽象的にして、一派の心理學的説明の所謂、觀念の性質の三面に現象せる者に外ならず、乃ち本來渾一體の發達なるが故に、調和協合を欠くの發達は、眞個渾一體

の發達たるを得ずして、早晚自滅の己むを得ざるべき者たり。觀念の本體的性質は智能なり、觀念の質及量の發達は是れ觀念開展の根柢たり、是れ思想開展が性能發達の根柢たる所以なりとす、而も更に情性及意志の協合的發達あるに非ざれば、心的現象の完全なる開展を成すに由なし。

第三、心身の全般に於ける開展。

此開展は即ち心身の調和の増進なり、心身の調和は、一面には身の發達より心の生理的根柢を發達し、他面には心の發動身に依りて完全に至ること、是なり。此兩面の完全なるを心身の調和といふ、此發達を欠くときは、性能の開展に於いて充全とす可からず。

以上身に屬する性能の四項、心に屬する性能の四項、及心身の全般に屬する開展、都合九項の開展を以て、思想開展の根柢より來る人間性能の發達と爲す。

右心の方面と、身の方面と、併に其總合と、此三點に着目せるは、普遍原理の説述に於ける根本的觀念に應ずる者にして、僅に其一偏を得たる従來の學説を修訂せる者たり。

第四節 人格の進歩

斯の如く人間性能の開展ありて、而して人格の進歩は效果す。人格の進歩の究竟の要諦は何ぞや、即ち自由の發達は是なり。自由とは行爲の根柢に於ける選擇の自由即ち是なり。

二三
次篇第一章と併せ覽
るを要す。

抑、人間現象は、悉く人格の發動なるは今更に論ずるを要せず、人の人たる所以の者に名づけて之を人格と謂ふ、人格の人的現象を生ずるや、即ち行爲の連續を以てす、行爲は實現なり、實現は理想を豫想し、理想は選擇を豫想す、理想に要素あり又規定あるも、理想の自由を奈何ともするなしとは、即ち選擇について言へるなり。選擇の自由は即ち行爲の根柢に於ける自由なり、之を名づけて人の自由と云ふ。

斯の如く人の自由は萬人に通じて没却す可からず、然らば自由は終始依然として不増不減不生不滅なるか、曰はく、自由の存在は終始依然たるも、自由の境界は移動する者なり、差等ある者なり。

一三
次篇第一章第三、四、五、六節に詳説あり。

何をか自由の境界と謂ふ、自由は動的原理なり、其活動には靜的對境あり、之を名づけて自由の境界といふ。自由の存在は絶對にして無規定なり、絶對無規定に非ざれば以て自由と名つくべからざればなり、然れども、自由の活動は其對境即ち境界の以外に出づる能はず、而して此境界や純然人格其者に倚繫す。

人格の發達するや、心身性能の發達あり、就中行爲の根柢、隨うて人格發達の根柢たる思想の開展あり、抑、思想や、實に選擇の對境の本體的要素にして、思想の開展は一般に性能の發達を來し、乃ち選擇の對境の第二的要素たる情性及意志の發達あり、此全體乃ち是れ人格の發達と稱する者なれば、人格の發達や乃ち選擇の對境を擴衍開展

一四
これ理法との協合に本づける提説なり、尙次篇第一章第五節を参照する可とす

す、是れ即ち自由の境界の開展にして、約して自由の開展と稱する者即ち是なり。^五

是故に、自由は其意義の當然要求する如く、其存在は絶對的恒久にして、其境界は漸次開展する者なり、之を名づけて自由の發達といふ。自由の發達は人格の發達究竟の要諦なり。

人間主觀的の意味に於いて自由の開展といふは、自由境界の開展の意味なり、自由の開展は斯く人格究竟の要諦なるが故に、自由の開展は亦客觀的人間存立の境界、即ち社會に於いて求めらる、是に於いて自由は個人的理想に繋る示命より一轉して社會的理想に繋る示命に及ぶ。^六斯かる自由の客觀的開展は社會的事項にして、轉じて社

一五
讀書の興會は思想の境
に非ざれば堆ふの
小判に非ざれば
進歩の非ざるを
以て察すべし
以て察すべし

一六
次篇第三章を參看す
るを要す

會の制度組織に於ける進化の原理に入る。政治的自由、信教の自由、學問の自由、集會言論の自由といふが如き、概して社會的自由と稱せらるるもの、皆是れ自由の客觀的社會的開展なり。凡そ客觀的自由は、主觀的自由の開展を基とす、之なければ無意味なりとす。

之を極論すれば、實地に於いて、自由境界の開展は即ち客觀に於ける境界の開展なり、自由活動の發達は亦客觀に於ける境界の開展を致す、これ自由の本質當然なるが故に、實地の効果の上には必ずしも活動と境界との分別を明にせずして、概して之を自由の發達若くは開展と呼び、以て人間進化の實質的原理の要諦と爲す、亦必ずしも妨げず、唯明晰を缺くの弊を病むのみ、ヘーゲルは此意味に自由の發達を唱へたり、是に於いて主觀客觀、個人社會の際について、氏の所謂自由の意義は明了ならず、此點を明白にせざれば、所謂人間意志の自由説より直に社會組織上殊に政治上の自由主義を抜き出だすが如き

突飛の推論過誤に陥るの虞あり。

社會の成分に於ける進化の實質的原理として自由の開展を立するは、正に自由行動説、自由史觀の本旨たり。諸般實質上の關係を檢覈し、之を根柢として立せる者、即ち此要義なりとす。

上來三節を以て社會の成分に於ける進化の實質的原理を立しする。思想の開展は其體に於ける根柢なり、性能の開展は其具體的考察なり、而して自由の發達は其用に於ける究竟なりとす。以下進みて實質的原理の第二項を査究すべし。

第五節 社會的自覺の發達

社會結合の要諦に關しては曾て詳に之を看たり。抑、既に二個以上の個人あり、而して渾一體なる社會を成せば、

一七
本書第二卷社會心理學
第三篇第一章第四節
社會的統制の條及第
四篇第一章第四節
社會的統制の條及第
四篇第一章第四節
社會的統制の條及第

是等個人が社會の成分たる所以の要義を求め、結合性といふ概念を以て此要義に充つるは、固より不可なし。唯此結合性といふ者は、果して心性の一部に限れる、後天的意識的動作とせざる可からざるか。

歐西學者の社會結合性に於ける見解は、其初や殆ど全く後天的事項として之を取扱へり。之を喩ふるに、個人を成分として社會の結成は、恰も煉瓦を組立てて家屋を築造するが如く考へ做すこと一般にして、隨うて其セメントとして社會結合性を尋究する、是れ一般の常套たりき。プラトンの理想國が古代に在りて突飛の人爲的社會を企て、ルッソの社會契約論、是より先又ボップスの社會起原論が社會の起原を純然たる人爲的事項に歸したるは、其最著明なる事例なり。爾來學術の研究漸く進み來るも、此舊套は之を脱却すること頗る容易ならず。乃ち彼協同生活説の理論として殆ど無効に近き薄弱なるは論を須たず、模倣説の如きも大本を遺妄して強ひて後天的要義を求

一八
スベンサルの協同生
活説、マルドの模倣
の本能的の類、ギッテ
のインダストリーの類
の類、ギッテの類

ひるの弊あり。是に於いて此論の發達は次第に概括的となり、竟に同類意識といふに至る。稍、後天性の減耗を見るも、實理の説示を距ると尙若干なり。

抑、社會の成立は、個人の生成其者と不可離の關係を有し、社會が個人を以て成立の規定とすると同じく、個人は亦社會を以て生成の規定と爲す。是故に、既に個人といへば己に社會を豫想す、乃ち社會の成分に對して在外的なる、後天的なる、所謂社會結合性の概念を以て強ひて這般を模捉せむとするは誤謬と謂はざる可からず。

個人と社會とが此の如く密着の關係あるに於いて、此關係の根基として存し、且社會の進歩、個人の進歩に隨うて益、發達する所の事項を抽象し、之に下すに社會結合性

の名目を以てするは、遂に自然なる、穩當なる見解なり。此意義に於いてすれば、社會結合性は、一に個人即社會の成分其者に於いて先天的自然的に既存すべく、二に社會の進歩に隨うて發達し、又其發達に隨うて社會組織は進歩を致すべし。乃ち社會結合性は、客觀に在りては社會の要素に於ける統一性及資用性即ち是にして、主觀に在りては直に人の社會的自覺に在りとせざる可からず。

意識の開展して第二期に進むや、人は自覺的境地に達す。此自覺は渾沌たる自我の觀念たるに過ぎざるも、人の成立に於ける必要規定として社會の重要、社會と自我との關係は、此觀念の裏、既に髣髴として認めらる。既にして自省愈進み、此關係に於ける知識の愈、順當に益、精緻とな

るに於いて、次第に此認識は明瞭的確となり、而して社會的行爲に於ける主なる規定の一となる。此初等なる乃至發達せる、自覺の裏なる社會的成分、之を名づけて人の社會的自覺と謂ふ。夫の同類意識といふものの如きは、唯其一面を抽象せる者なり。社會的自覺は渾然たる一體に命名せる者、而も其發達せる者について見れば、固より同類の意識を具へ、且自個と社會との、一に發生上の關係、二に體制上の關係、及三に運營上の關係について順當精緻なる觀念より成り立つ者なり。

社會的自覺は後天的人爲的の事項にあらず、社會的自覺は社會の發達に隨うて益、彰明且的確なるを致し、而して還た社會の組織をして鞏固ならしむるに與かる、是れ

即ち客觀の社會結合性を成す。斯くて社會的自覺の發達は社會進化の實質に於ける一大要素にして、而も社會の成分の範疇、社會組織の範疇、二者の孰にも屬せず、正に其中間なる、所謂結合の範疇に屬する者なり。

社會的自覺の發達の効果は、即ち社交性の發達にして、純然道德的の事象を成す。同情發達して愛に進み、愛發達して仁に進む、是を人道の至高點と爲す。

同情を以て社會成立の根本原理に擬するは、多くの社會學者の爲す所、而も其生成發達と社會との關係、未だ詳明を得ず、且同情といふ語は、極めて單純素朴なる意義を有するに過ぎずして、最も初等なる徳の目としては、之を用ゐ得べきも、大に發達せる此種の徳の目には、之を充て難し。歐西に於ける道德の研究、與件に富まず、淺と隘とに止まるの已むを得ざる一事ながら、幸に東洋に生れて諸般の與件及其

觀念を有する者、資りて以て學說樹立の料と爲すに於いて躊躇せざるを要すべし。予は同情を以て社會的自覺の顯現の一方面と做す。

是故に、社會的自覺は人の先天的自然的に有する所に基し、即ち其形體的根柢は人の生成の事實に基し、而して其發達は社會の發達と相互に因縁の關係を成し、其大に發達するや遂に人間至高の徳を形成する所以の者なり。抑、社會や實に宇宙間萬有の體統上最高位に在る者なれば、之に密關不離にして生成するの徳は亦最高ならざる可からず。今や最高の徳が社會的自覺に由り、社會の發達と相糾纏して發達し、而も亦人の性に離れざる、即ち性に率ふ者なる所以を詳にするを得たるなり。

コムトが社會進化の本質を以て道理の發達に歸して人道說を立

せる、ギッディングスが社會組織の進化を以て道徳的に究竟すとせる、鎔して既に這裏に在りと謂ふ可し。

第六節 社會組織の進歩

社會の成分は斯の如く進歩し、所謂社會の結合性亦斯の如く進歩す、而して社會亦之に應じて改革變遷を受くべく、一定不動なる可からず。

社會組織の進化の根柢的要義は、第一に自由の開展なり、第二に人道の發達なり。自由の開展は、客觀的開展即ち活動の發達を意味す。人道の發達は、人間道徳の最高なる者が次第に實現の範圍を進め行くことなり。此二者は決して相撞着せず、自由の開展は人間行爲の自由を増進し、

行爲の自由の増進は亦人道の發達に必要ななり、人道の發達は衆多個人の關係に調和を致し、調和は自由の開展に好境地を與ふ。即ち此二者は相撞着するの虞なく、社會の進歩は二者の共に行はるることを旨として其組織の變遷を現することを得可し。

社會組織は純然歴史的事項なり。凡そ社會組織の今日見る所の具象的實在の如くならざる可からざる所以の絶對的根據は一も存することなく、亦存するを得ず、是れ恰も生物の形體が今日見る所の如き者ならざる可からざる所以の絶體的根據の一も存せざると一般なり。自然創造史の説明する所は、唯生物種類の開展して今日の生物界を成すに至れる相對的理由のみ。社會組織の發達の

研究も亦同様なり、云云の状態に起點を有する社會が云云の關係に在るときは云云の發達を遂ぐ、といふ説明を得むと期するまでにて、絶體的に社會組織は斯く斯くならざる可からずといふの根據は、毫も存せず、隨うて此問題には觸る可からず、立す可からず。

從來社會組織の進化の具象的事實として提供せらるる者は歴史の與件について概括を試みたる者に過ぎずして、普遍の學理上、甚た價值を置くべき者に非ざるは言ふまでもなし、今之を二個の範疇より分類するを得べし、第一に實質的分類なり、第二に形式的分類なり。

社會組織を實質的に分類し、約して三種と爲す、一に宗教的組織、二に法制的組織、及三に道德的組織、是なり。

二〇
次篇第二章に詳なり

第一。宗教的組織に在りては社會を組成する人衆未だ充全なる發達を成さず、自ら自個を經紀するに堪へずして、唯他力に依頼し以て生存を計る、即ち依他主義^{二〇}を以て根本理想と爲す。此組織には、一人の首長ありて、此首長は即ち宗教的他力の主體たる神の代表たる、特殊なる資格を有し、其が社會の一般人衆に臨むや、絶對的權力を有す。此組織の單簡なる者に在りては、社會に於いて上に此一人と其下に人衆とあるに過ぎず、古のドルイド族社會の如き、是なり。其複雑なる者は、中間に種種の機關あり、各機關は有限の權力を行使す、羅馬教、希臘教の各國に於ける者、是なり。是等の差等はあれども、概して宗教的組織は、統治上には專制主義^{二一}を取り、自由も、人道も、未だ開展發達の

二一
次篇第三章に詳なり

域に到らず。但し斯くても社會組織有るは、之無きの更に弊の大なるに優れるより、其社會に於ける多少の先覺者は、進みて右一人の地位を取る者とす。宗教的組織は、時として直に政治の形に於いて成り立ち、時として純然宗教の職を以て政治の體制と並び立つ、宗教的專制主義と政治的專制主義との駢び行はるるはこの場合なるが、而も一社會に於いて二様の專制主義の同時の支配あらむとするは、專制主義の本義と撞着するが故に、斯かる政教の關係は多く社會の難問題を醸し、本來兩者の完全なる合一に於ける社會を除くの外、すべて争鬪の巷を現するを免れず。

第二。法制的組織は、社會の人衆、既に自個を見ることを

知るも、他を顧ること或は不能、或は困難なる程度の社會即ち自我的動機の主として作業する社會に適當する社會組織にして、自存主義^{三三}を以て根本理想とす。故にこの組織に於ける社會人衆の分限の根本要義は、各人の出來得るだけ膨脹するを旨とす、權利の統制是に於いて起る。法制的組織に於ける社會の統治者は、法制的執行者にして、宗教的組織に於ける統治者の如く超絶的神意の執行者に非ず。法制は權利を保障し、併せて權利の衆個人の間に相衝突するの防障となる者。斯かる社會に於いては、法制一様に萬人を支配するが故に、人の自由は其最低度の人^{三三}が保有し得るを標準とし、其平準は此點を以て制限とす。乃ち自由は完全なる開展を得ず、唯平均に行き亘るを旨

二三
第二章に詳なり

とし、大に開展するを旨とせず。人道も亦其最低の人が享有實行し得るを標準として一界劃を立つるが故に、其發達は甚だ便利なる機會を得ず。法制の時時の改良、及衡平法等によりて、各時の事情各等の人格に對する適應を得むと計れども、到底不完全を免れず。

第三。道德的組織に在りては、人衆各個、實在の要義に率由して身を處し、各人各個、其分に應じて完全なる自由を享受し、而して人道は些の妨障なき發達を遂ぐ。人衆は其根本理想を大觀主義^{三三}に置き、社會組織は自然的に開展發達して、其程度を高くし深くするの外、絶えて人爲的なる者なきに至る、是れ人爲的なるは各人各個に於いて其宜を致すを得べければなり。

二三
第二章に詳なり

之を二條の根基的要義に本づきて批判すれば、社會組織は、宗教的よりも法制的に、法制的よりも道德的に進むに於いて、實質上の進化を成すと謂ふ可し。

次に社會組織を形式上より分類すれば、左の三類とするを得可し、一に家族的組織、二に軍隊的組織、三に産業的組織これなり。

三圖
K. V. Parson's
Soc. Part V. 末一章
の Military Society and Industrial Society を論ずる。
I. Family System.
II. Military System, Industrial System.

第一。家族的組織は、人類自然の關係より發生する者にして、意識的に一定の目的を以て社會組織を決定する者にあらず、乃ち親子同胞の關係の擴衍より成れる社會組織なり。其族長は統治上の首長となり、社會組織は、其複雑となるに隨うて自然に複雑を加ふる統治機關を具へ、頗る圓融調和を以て發達するを得。

第二。軍隊的組織は、既に意識的に、又外面に向うて一定の目的を以て結成する社會組織にして、其目的は乃ち外敵に當るに在り。是故に此組織の最大要件は統一に在り、隨うて首長は臣下を統御し、臣下は首長に服従し、此統御及服従の關係の絶對的なるに近きに隨ひ、此組織は益、完全なり。社會組織の大を加へ、複雑を増すや、數多の階級ありて體統相屬す、斯くて最下に位する者は絶大なる服従を負ふ者となる、封建制度は此組織の最も著明なる者。

第三。産業的組織は、亦意識的、殊に内部に向うて一定の目的を有する者、其目的は乃ち産業の興隆に在り、經濟の一大原則たる分業協力の發達を企圖し、これが爲に頗る複雑なる體制を具備するも、其關係の要義は唯協力に在

王是なり。

法制的對關は、現今世界が向うて進まむと希圖しつゝある所の者にして、其體の如何は、問題として研究を須つ、但し其統治的權能の體なるを容さず、即ち一に有限、二に有期の體たるべきは確なり。現時は唯^{二七}所在個個の事件に應じて、少しく此關係を生成しつゝあるの時代に在り。

本書第二卷社會學
第二章國際學
第三節國際體
第七節

道德的對關は最も希望に堪へたる者、而も未だ曾て之を案出せる者なし、但し之を絶對不可能と爲すの根據なきは、社會進化の原理に於いて確證せらる。

社會對關の形式上の分類に於いて、家族的對關は之を言及すること難し、是れ世界人類の^{二八}一源論は成立し難く、又家族關係の及ぶ所は同一社會を成す可ければなり。唯

本書第三卷社會論
第一章社會の發生
第二章社會の發展
第二節

二九
英米の對關はこれが
適例なり。

本國と殖民地との關係は、最も家族的對關に幾し、是れ將た頗る不安定にして、やがては同種同文の兩國社會對關に化す^{二九}。此外尙民族主義的關係の數國社會に聊か其面目を見る。

軍隊的對關は諸國の聯合が外敵に當るの場合に在りて暫時或は見る所、其有期なるべきに拘らず多くは無期に流れ行く^{三〇}。軍隊的對關の繼續する期間、服從社會の統治權は虧損せらる、此社會は、其期間獨立社會たるの資格を失ふ、故に軍隊的對關は、嚴密に言へば、社會關係に在りて成り立ち得可からざる者なり。

産業的對關は現今の社會對關の通勢にして、宇内各個の社會が相共に分業協力を成し、宇内を擧げて一大産業

三〇
普魯西の下に獨逸諸
邦が佛國と戦へるは
其完全なる例なり。
列國軍が支那の下に
るは其不完全なる例
なり。

第一章 理想汎論

第一節 緒論

社會進化論と社會理想論との社會動學に於ける關係は、互に能規所規を相成して、其叙述の先後を定むるに難からしむ。理想論は理を明にし、進化論は勢を詳にす、理は勢に即かず、勢は理を離れず、不即不離の關係、是れ理勢の依相なれば、社會動學の二分枝の關係亦複雑なりと謂ふ可し。既に強ひて先づ進化論を叙し了りたれば、今や進みて理想論を述べざる可からず、乃ち理想論の説述は較、容

易を加へたる者と謂ふ可し。

理想の研究の重要は今複説を要せず、其重要にも拘らず、従來の學者は、學問上研究の困難といふの故を以て之を拋棄せるが多かりき。則ち學者の拋棄せるあるも、實地の必要は拋棄の故を以て消滅せず、乃ち違違として膚淺なる論客者流の取りて之を取扱ふに任せたるが故に、主義理想の名目ばかり粗雜なる意義を有する者なきに至れり。今これの取扱に進むは、殆ど學術的鋤犁を此囿圃に入るるの嚆矢と稱すべきものたり。

社會理想論に約して三章と爲す、理想の性質、意義の説
明を一とし、個人に關する理想を二とし、社會的行爲に直
接する理想を三とす。

フリストの理想學 Ideologie
九段學問の最上
社會學の統制を
持立の科とせし
は、之を擧げざる
優れども學問の眞
體を逸せるもの。
Coste: Principe
d'une Sociologie ob-
jective.

II
Adolf Wagner:
Grundlage der
Volkswirtschaftslehre.
1892.

III
Gustav Schmoller:
Grundriss der Allge-
meinen Volkswirth-
schaftslehre. 1900.

IV
Friedrich List: Die
Theorie des nationa-
len Systems der poli-
tischen Oekonomie.
1887.

V
Gustav Ratzenhofer:
Wesen u. Zweck der
Politik, als Theil
der Soziologie. 3
Bde. 1896.

社會理想の研究が従來の學者に彼が如く閉却せられたる、寧ろ學
界の異事といふべし。蓋し輒近學界の進歩、殆ど其實験的思潮の漲溢
に負ふ者多く、其弊や理想の實地的研究をも、以て實驗的精神に背戾
すと爲して之を一排し去るに至れるなり。理想の實地的研究なきや、
萬般行動の統率歸嚮たる大標準をば、單簡、粗笨にして又杜選なる獨
斷教に据ゑ去りて怪まず、幽を聞き微を顯はす所謂科學的研究は、偏
に其方法手段の末に止まるを致す、何ぞ其痴なるや。輒近經濟學、獨り
其弊に堪へずして、猛然として理想の根本的研究に當らむと擬す。フ
グネルの經濟原論が其第三版に於いて大に心理の研究に腐心する
に至れる、乃ち其適例にして、近時シュモルレルの新著の如き、亦最も此
點に焦慮せるを現す、リストの如きも夙に主義の誤謬の最も恐るべ
きを注意せるの一士なり、近時の政治學者は、其すべてに向うて幼稚
なるに拘らず、主義の研究を忽諸に附せざるは喜ぶべし。ラッフェンホ
フェルの如き、最も多とするに足る。法理研究の徒、ひとり甚だ此方面に
心眼を開くに至らず、其此に注意するものも、往往形而上的思辨に到

六 質克彦、法理學と題する諸著

七 Fomilke : Idee moderne du droit. 1900.

底して社會學的研究態度を取るに至らず、僅にフメエエの研究の聊か面目を新にせるありしのみ。

而も組織的研究以外に理想主義の福音を世に齎らしたる哲人傑士は、古代の如く、近世に至るも亦甚だ出現を罕にせず、乃ち理想の研究の興件は近時毎に其數を増しつゝあり、殊に其著大なる増進を促せる因縁は、世界交通の一大革新によりて、東西兩洋特殊の文明の相觸接するに至れること是なり、今日に在りて、新主義を唱道せむとする者、若くは新主義の出現を望む者、寧ろ理想主義の實理的批判を以て其程を發せずして、可ならむや、從來理想主義の現する、或は宗派の區別に由り、或は所屬の國性に由り、各個特色と偏癖とを有するは已む可からざるの勢なりし、今實理的批判をこれに下すは、乃ち這般の固陋偏癖の城牆を破壊する所以、而して實理的學問の光明は、實に行實の流末を照すのみならず、進みてその源泉を清うするに至るべきなり。

唯社會理想論の研究は、斯く學問上全く新なる研究なるが爲に、分

類統攝、悉く創意に本づかざるを得ず、之を難事と爲すのみ。

第二節 理想の發生

人間意識の發達するや、其用たる意情智の發達を來し、寫表の時期より進みて自覺の時期に入るや、所謂反射的作用の一種としての行動は進みて自發的行爲となる、是れ即ち理想の原始的發生なり。

自覺の時期に在りては、既に行爲の自發的なるを致し、隨うて行爲の發源たる心的發動あるも、是等は唯斯かる心的發動たるに止まり、未だ思想の結果により、充分なる權威を以て行爲の示命たる者に非ず。然るも尙斯かる心的發動の漸次發達せる者、遂に思想の時期に至りて完全

なる理想となるが故に、此單純なる心的發動を目して、敢て理想の始源と爲さざるを得ず、之を進化史上の事實と爲す。

所謂完全なる理想とは如何なる者ぞ、今やこれが論定に向うて進むべし。

第三節 理想の要素

理想は左の四項の要素を具備するに於いて完全なりとす。

第一、思想に於ける存在。理想の存在は何處に在るか、思想に於いてす。思想界中の存在は皆是れ觀念なり、是れ想なり、理想の想と稱せらるる所以。

第二、實現し得可き存在。理想は其本來の約束上實地行爲の示命者たるべき者、故に多くの心内、思想界に存在する想の中に就いて、實現し得可からざる想や、觀念や、以て理想とするを得ず、理想は必ず實現し得可き想たらざる可からず。

第三、理法と協合する存在。理想は第三に宇宙の理法との協合ある者たらざる可からず。抑、理想は單に心内の存在として止むべき者に非ずして、必ず實現せらるるを要する者なり。凡そ單に心内の存在として止むを得る者は、思想の理法即ち論理的理法に協合するを要し、更に心外の實現を要する者は、世界萬有の理法即ち一切の進化世界の理法に協合するを要す。理想は固より此心内、心外

第五節 理想の自由

理想已に斯の如く諸種の規定の下に在り、則ち全く自由の餘地を存せざるに非ずや、と疑ふ者あらむ、是れ惑へるのみ。斯かる規定の下に在るも、規定の及ぶ能はざる領域あり、是れ即ち理想の自由の存する所なり。今理想の自由と各種の規定との關係を明にして惑を辨ずべし。

第一、理法の規定と理想の自由。理法は理想を規定するも、理想構成に於ける選擇の自由を害することなし。選擇は理想の實質の決定なり、此決定は固より人の自由に存して、毫も理法の規定の立入る範圍に在ることなし。理法の規定として立入るは、此決定ありたる以後に於いて、

理想をして其要素を具足せしめむが爲に、左の二様の手續に於いて規定となるのみ。第一、理想に於いて論理的規定の立入るは選擇の後に在り、選擇は理想の實質の決定なるが故に、純然たる思想の理法とは其範疇を異にす。第二、實現の必要上理法が特殊的に理想を規定するは、亦毫も選擇の自由を害する者に非ず、此規定も亦選擇以後の事なり、若し時として選擇の對象唯一個にして、所謂選擇の自由を存せざる場合ありとするも、そは規定によりて然るにあらで、要素の缺乏に坐する者に過ぎず。

第二、心的状態と理想の自由。心的状態は理想を規定するも、亦是れ選擇の自由を害せざるなり。但し個心の差の爲に、甲の心に在りては選擇の對象として成立し得る

者、乙に在りて成立し得ざるあり、而も乙は亦乙の有する諸般の對象について選擇の自由を有す、故に主觀的規定も亦爲に理想の自由を害し了るを得ず。第一、材料の多少は選擇の對象を供するに於いて最大の効果あり、材料多き者は對象數多なるを得べく、材料少き者は之に反す、故に理想の自由は依然たるも、其効果は此規定に倚繫すること大なりとす。第二、主觀の形式規定は、亦選擇の對象の品質に影響するのみにて、理想の自由は爲に害せらるることなし。

是故に理想の規定は、毫も理想の自由其者を害することなくして、唯、主觀的規定より、選擇の對象の品質に於ける差等、又は分量に於ける増減を來すあるのみ。理想の自由は一切の規定以上の事項なるが故に、超然として自在なるを得るなり。

第六節 理想の決定及實現

自由なる理想の決定を與ふる者は智情意の主宰たる人格是なり。即ち理想の自由を具有して且これが能規たる者は、唯人格是のみ。今斯くして決定せられたる理想の品質を概觀すべし。

第一、理想の品質は人格の發達如何に倚繫す。理想の決定者は人格なり、人格は一定不動の者にあらず、時により、處により、又各個人により、千等萬級あり、故に此差等ある人格が理想の決定に影響するや亦數多の差等を生ぜざ

る能はず、而も決定せられたる理想は、數量の等差を有せず、即ち人格の影響は理想品質の上に現れざるを得ず。

第二、理想の品質は見在に倚繫す。他の一切の條件均等なるときは、見在は理想の品質を決定す、蓋し人若し見在に満足するときは理想の要あることなし、理想は必ず多少見在を改革せむが爲に起る者、而も見在を距ること幾許なる理想にして始めて成立し得るかの決定は、他の條件總體によりて一定するが故に、理想の品質は亦見在を一條件として之に倚繫するなり、

第三、理想の品質は實現の能力に倚繫す。實現の能力は實現を要素とする理想の品質に影響す。實現の能力は、一には人格の發達に由り、二には見在の勢による、即ち主

觀客觀の二要素より成る者なり。是れ實は前二項の支系なれども、重要なを以て特に茲に掲ぐ。

抑、理想は必ず實現を豫想して乃ち立つ者、故に特に實現について言ふべき者ならず。今理想と實現との關係について、は直に左の斷案を供するを得べし。

- 一、理想の生成は實現の生成なり。
- 二、理想の進歩は實現の進歩なり。
- 三、理想の研究は即ち進歩の研究なり。

是れ即ち原理原則各處の所論に應じて、之に立證を與ふるもの、個人については知行合一論、社會について自由行動説又自由史觀、即ち社會進化の原理に應ずる者とす。

以上一般に理想の性質を看了る。

斯の如き性質を有し、斯かる方式を具ふる理想は、其實質に於いて如何の者ぞ、今先づ理想の實質について少しく講明するあらむとす。

第七節 理想の實質

理想の實質は各種の理想の種別を成す所以の本質なり。理想が各個實地の効果を期するは其實質による、實地の効果より理想を考ふるや、唯其實質を見て餘地一般の性質を顧ざるを常とす、是れ餘地一般の性質は、既に理想といへば必ず之を具備する者にして、甲理想を乙理想より區別する所以の者に非ざればなり。

曾て理想を解するに、恒久諸事目的を以てせり。凡そ理想は、廣く之を解すれば、固より一事に一事の理想あり、亦

隨うて一時的實現を以て了る理想ありて、必ずしも恒久と諸事との要件ある者に非ざれども、是等は單に理想的といふ形容詞を以て理想の義を含むを表するに止まり、一般に理想と稱する特立の示命的觀念は必ず多少概括的の實質を有し、隨うて其効果は恒久に及び諸事に關するを常とす。

抑、理想は實地に於ける各事に向うて、一に實現的示命なり、是れ理想の本質にして、之無ければ以て理想と名づく可からず、而るに實現は究竟なり、實現以前には選擇の自由を存するも、一たび實現に來るや、一毫變換の自由なし。故に實現は究竟にして、これが示命たる理想亦必ず二に究竟的示命たらざる可からず。究竟的示命たる理想は、

必ず其自體に於いて充足の事理を具へざる可からず、即ち自體に於いて完全に且充分にして、他の同様の事項、例へば他の理想の規定を受く可からず、若し斯かる規定的理想あるときは、此能規の理想即ち眞の理想にして、所規の理想は究竟的示命に非ず、隨うて究竟たる實現を成すの效果なく、乃ち理想の本質を失ふ、故に三に理想は必ず自體に於いて充足の事理を具へざる可からず。既に自體に於いて充足の事理を具ふるを要すとすれば、四に理想は亦必ず概括的普遍的ならざる可からず、事物の特殊的研究は到底究竟的研究たる能はずして、唯渾一的研究能く之を成す、故に理想の效果は此概括普遍の進むに隨うて増大し、其退くに隨ひて減少す、此概括普遍は即ち理想

をして恒久的及諸事的ならしむる所以なり。

是故に理想の實質には四個の屬性あるを知る、實現的示命其一なり、究竟的示命其二なり、事理充足其三なり、普遍恒久其四なり。^{二三}

- (1) Idealistic Imperative.
- (2) Ultimate Imperative.
- (3) Sufficient Reason.
- (4) Universal Permanent.

第八節 主義

理想は普遍恒久の性質を有し、且其四個の屬性の相關や緊密なり、乃ち究竟的なる完全理想の外、其協合を以て、且其に隨從する、若干不完全理想あるを得べく、復此各個の不完全理想の下、更に其各個の協合を須ち且其に隨從する第二等の不完全理想あるを得べし。而も是等の不完全理想は、各冠位なる較完全なる理想と協合する限り、皆

るを自證するものなれども、而も中位以上の理想の協合にして誤らざるときは、一位上位なる、隨うて一位廣汎なる、それだけ時務に適切ならざる、主義とするには適當なりとす。

主義の形相は、體系的なるあり、然らざるあり、其然る者は論理的秩序を以て主義の體を具ふ、其然らざる者は多少其具備の不全を見はす。本來、主義は、最も實地の示命を以て任ずる者なれば、顯に體系的形相を具ふること學術事項の如くならむは、必ずしも以て之に責むべきに非ず、唯之を剖析し之を吟味するに於いて全く這般の論理體系の確且明なる者なきとき、茲に始めて其不完全なるを斷すべきなり。主義の吟味の困難なる所以とす。

第九節 理想と學理

主義には責むるに論理的體系的形相を以てす可からず、責むるに這般の形相を以てす可きは學理なり。

主義と理想との關係は既に之を詳にし、理想と理との大體に於ける關係も亦既に之を明にしたるが、此中間を連絡する者は即ち學理なり。學理は理を捉へて以て理想の之を用ゐるに供する者なり。

學理の何たるかは既に之を説けり。夫れ理想の體系の形式は全く事物の體系の形式と相應ず、學理の體系の形式も亦全く事物の體系の形式と相應ず、是れ學理は事物を論理的に分類彙羅して以て之を對象とすればなり。是

故に理想の體系の形式は亦學理の體系の形式と相應し、即ち理想と學理と、兩者の間、殆ど隔障若くは迂路の存するなく、直接疏通の關係に於ける者たり。學理は宇宙事物を對象として其理法を探究するの結果、宇宙の理法の顯現措定なり。理想は實地の必要の識認に應じて、存立する與件に選擇を加へ、之を這般學理の範疇に投入し、之と協合して以て實地の示命を成す者たり。されば學理は宇宙事物の觀察的研究に成り、理想は實地示命の主觀的選擇に發するも、兩者の協合融和、直接切近に之を言へば、選擇の學理に没入するに於いて乃ち理想の成立を見る者とす。是れ即ち學理と理想との合體なり。學理に與ふるに示命的活動を以てする者、即ち理想なり。

抑、學理の範疇は所謂理論の範疇なり、理想の範疇は所謂實際の範疇なり、所謂理論と所謂實際との調和なる者、斯の如くにして始めて之を實地に見るを得べき者、而して後學理の眞價值眞効果は遺憾なく發揮せられ、實際と謂ふ所の者亦其盲目的行動を擺脫するを得て、文運の進歩に伴ひ、之に相應せる進運を效すを望むべきなり。斯の如くにして人生社會の完全なる發達の方式は正に始めて達せらるる者とす。

第十節 個人的理想及社會的理想

理想の實質に隨うて理想を分類せば、分類の標準に隨ひて雑多の諸綱目を得可きも、そは汎論の企つる所に非

111
Weiss: Sociale Fr-
ge u. Sociale Ord-
nung. は各種の主義
を論じて頗る詳明。

112
F. Schmidt-Warneck:
Die Sociologie I. 亦
序論の體にて多少近
時有名の主義を批評
すれども甚だ体系的
ならず。Die Notwe-
ndigkeit einer Social-
politischen Propädeu-
tik. 1885.

113
Victor Considérant:
Deutsche Sociale. 8
vols. 氏のは理想主義
の論評よりも寧ろ理
想の尋求に熱心にし
てユームトの繼續者た
るの形あり。氏は大
要なる人道に歸す。

114
Jean Izoulet: La ci-
té moderne et la mé-
taphysique de la so-
ciologie. 未章に Dix
principales conclusi-
ons を掲ぐ。Ch. 614-
067) 其目左の如し。
1° Le problème mo-
rale: optimisme
et pessimisme.

9° „ de la gnose :
grotesquisme et ag-
nosticisme.
3° „ ontologique :
Matérialisme et
immateralisme.
4° „ mental : cer-
veau et âme.
5° „ religieux : thei-
sme et athéisme.
6° „ politique : ar-
chie et anarchie.
7° „ ethnique: egot-
isme et altruisme.
8° „ divine: e-
conomisme et soci-
alisme.
9° „ esthétique: sci-
ence et poésie.
10° „ critique: cri-
tique négative et
critique positive.
倫理の方面多少の研
究者 NOVIKOW, FERRI
等三四十あり。隨處
の註に之を掲ぐべ
し。

115
Henri Lagrèssille:
Vues contemporaines
de sociologie et de
morale sociale. 1899.
氏は社會を Riscan
d'idées vivantes なり
と云ふ。

なるを見、直接此責任に當る帝王の理想は太た之を講明せり。マキア
ゼリ以下の論客輩出せしも、帝王の國を率ゐるの理想を教ふること
は頗る疎かりき。又社會經營の責を以て人民一般に歸する、民主の精
神を認むる國、例へば英國の如き、又貴族共和の制を有するゼニス
の如きを以てするも、這般の理想とす可き者は、唯是等衆人の個人的理
想の實現の爲に設くる者なるを主として、未だ特立の社會的理想な
る者あるを自覺し探討するに至らざりき。第十九世紀の初に至るに
及びて、僅に漸く少數識者の間に此自覺を發し、其勢は徐徐たるも而
も駸駸として以て今日に至れり。

今眼を轉じて印度を見るに、此國には超絶的信仰界と個人とある
のみにして、社會の重要は極めて些細なる者なりき。民衆の生じ、活き、
又死するは、過去の造業に由りてし、生活は其自個に目的を有するこ
となく、唯業を滅し佛果を來世に得るが爲の贖罪場たるに過ぎず、苦
集滅道四諦の教は之を説明して餘あり。故に個人の理想は全く宗教
的理想に没入し、社會の理想などいふ者は、嘗に其自個に於いて獨立

の存在を有せざるのみならず、亦個人の理想中にだも殆ど其影を存
せざるの勢なり。此國に於いて到底社會的理想の發達を求め得難し
とす。

終に支那日本を觀るに、是等の國々に在りては、始より個人的及社
會的理想の區劃を設けず、兩兩相融合して以て人生の理想を立てた
り、故に斯理想は個人的理想たると同時に社會的理想なり、治者の理
想なると同時に被治者の理想たり。唯純然たる被治者として固定の
地位に在る者は、就中幾分の到達を除却するを妨げず、而も斯かる被
治者の理想も、亦發達すれば直に治者の理想となり、其間一の斷離隔
絶なき者、是れ支那に於ける理想の特色なり。所謂誠意正心より以て
治國平天下に至る、一貫の要道、以て社會人衆の大理想たりしなり。

世界に於ける是等三様の關係、個人的及社會的理想の間に存する
も、其孰れか最も善美なる關係なるかは、暫く措いて論ぜざるを妨げ
ず、既に斯く個人的及社會的理想の名目の下に數多の觀念の存在あ
りしを認むれば、今吾人が社會理想を尋求するも、從來存立の衆理想

個特殊の末に存せずして、概括普遍の大本に存するが故に、今此題目の下に取扱はむとする所も亦這般普關の大本に存せずんばならず。蓋し學理は概括的原理なり、之を各個特殊の場合に應用し、行うて之を宜うするは即ち實行の事なり、此故に學問上取扱ふ所の理想は亦最も普關なる者に止まらざるを得ず。

理想の最も普關なる者は直に宇宙の第一原理と密關する理想なり、斯かる理想を呼びて**根本理想**と爲す。根本理想は宇宙の第一原理に究め到りて始めて立つべき者而も其極めて普關的なるに應じ又極めて抽象的なるを免れざるが故に、實行に對し一層近き理想即ち一等劣位なる理想の輔を介して始めて實地の理想となる者とす。

Fundamental Ideal
と譯す。

實地の理想の最も究竟的なる者は通常是等劣位の理想即ち是にして、即ち學問上取扱はるべき理想を成す、而も是等は根本理想の上に立つ者に外ならざるが故に、是等の理想を取扱ふは必ず根本理想の取扱を経ざるを得ず。故に學問上に取扱はるる理想は根本理想及實地の究竟理想即ち是なりとす。

根本理想は固より不一無二なり、模索の方面によりて、其形相を異にして二以上なるが如く見ゆるあらば、是れ模索の不充全を表す。之が劣位に在る所謂實地的究竟理想は、其模索即ち着目の點によりて若干の品類を生ずるを得べし。從來此品類は、最も重要なる者に於いて、左の三類の大別に隨へるを見る。

II
(1) Ideas as to the criterion of conduct,
(2) Effect of conduct,
(3) destiny of life.

第一、行爲の標準に基づく理想。
第二、行爲の效果に基づく理想。
第三、人生觀に基づく理想即ち運命觀。
今亦此三題目の下に實地的究竟理想を取扱ふを便とす、是等は十字分類なれども、内包的關係は多少これありとす。

第二節 根本理想

III
De Greef: Transformisme social 上篇
L'Evolution de croyance et des doctrines
本理想の發達運命を教せるの蓋しコムトを紹きたるなり。初三章は勿論、其Discours sur l'Espit positifを以てするも、徹底的に根本理想の批判を供す。

根本理想は人生宇宙の第一原理に協合して成立する者、此第一原理の考定の種類に隨うて差あり。而も多くは其考究の淺薄にして單純なる、名づくるに根本理想を以てするの價値なく、寧ろ數等劣位の理想と伍列するの適

當なる者多し。斯くて真正なる根本理想の分類は太だ單簡なるを得べし、即ち左の如し。

- 第一、依他主義。
- 第二、自依主義。
- 第三、大觀主義。

第一、依他主義。依他主義は一切人生の存在を舉げて人生以外の存在の支配に歸し、行爲の標準も、人生の運命も、一切は此他物に依りて存在すとす。一種の根本理想なり。其人生宇宙の第一原理は、宗教的第一原理たり、其所謂他物は神と汎稱せられ、神と人生との融通貫道は信仰と稱する機能方法に賴る。凡そ從來の成立宗教は殆ど皆此種の根本理想の上に立ち、此種の根本理想を實現せむ

IV
大觀主義は Universalism と稱す。自依主義は Autonomism と稱す。依他主義は Heteronomism と稱す。之を以て其譯に充て、之に準じて依他主義は Heteronomism の語を新作せむ。或は Supernaturalism の名目と與ふるも可なるべし。

いて自個の司配を認め、而も之を認むるや絶對的にして、甚た自個以外の人生宇宙に重を置かず、是を以て這般の司配を體認するにも、亦唯己に在る者を盡すのみにして、絶えて外世界を詳にせむと力めず、即ち所謂形而上學的、根本理想に頼りて以て立つ。此種の根本理想は、內的經驗を重んじて外的經驗を輕んず、則ち內的經驗と雖も、其過去に屬する者は既に外的經驗の一部を成すとして、亦甚だ之を重んぜず、是を以て其理想の資料や、唯、心裏、見在の狀態活動に偏倚し、一切の經驗は全く之を重視せざるに至る。然れども此理想は、第一類と異にして、自個に在る者は之を盡して以て自個の司配と成さむと期するが故に、心的賦能は擧げて之が用を盡さむとす、唯其外世界を重

六
カ
ト
出
生
涯
百
里
の
終
は
る
に
上
る
支
へ
地
大
才
の
學
は
其
由
の
形
は
其
科
の
一
は
那
に
於
て
の
形
は
思
辨
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
來
る
思
辨
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
學
問
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
以
て
來
る
思
辨
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
た
る
形
而
上
の
學
問
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
所
以
の
形
而
上
の
學
問
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
代
の
形
而
上
の
學
問
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
交
代
の
形
而
上
の
學
問
の
榮
の
後
に
至
る
支
へ
皆
通
例
を
供
する
者
の
如
き
の
時
の
如
い
興
哲
に
至
る
支
へ

んぜざるの結果は經驗を重んぜざるに至り、經驗を重んぜざるの結果は意志の行動及多少亦感情の發動を重んぜざるに至り、結局心的賦能中獨り智力の活動のみ盛なるに至る。依地主義が信仰に頼りて神と人生とを融通せむとするに對し、自依主義は智力によりて自個と人生とを貫通せむと期す。形而上學の徒が實行に迂に、世界に疎なるは、皆斯の如くにして來る所、唯自個見在の智力、其發生の要素たるが爲に、行實及知見を擴うするの抑束ある時代、社會、個人に於いて、此種の根本理想の行なれ易きは當然なり。

第三、大觀主義。人生宇宙に於ける一切は自體の司配に於いて存在すと觀ずる根本理想にして、人生宇宙の各

個物、皆人生宇宙の全般中の一員として相關の存在を成すに於いて、諸物悉皆平等なりと觀得す。故に人生、人も亦宇宙の一個存在として此平等列中の一たること、木石禽獸と異なることなし、結局、特に超絶的地位を人に與ふることは休止す。斯く宇宙は宇宙により解釋せらるべく、乃ち人を始として、宇宙萬般の實在は、皆其分を盡して宇宙の解釋を成さざる可からず。人は其賦能の全般を盡し、亦力の及ぶ限り萬有を利用して以て宇宙を解釋せむとす、即ち自個に適して僅に自在なるに安んぜず、宇宙は宇宙、人生をも含める宇宙に頼り且由りて宇宙を司配する者と爲し、人は宇宙の裏に在りて人に屬する職分を成さむと期する者、之に下すに大觀主義の目を以てする所以

七
The universe itself
by and through it-
self.

八
本書の全體乃ち之が
注脚たり、就中其直
接注脚は本篇社會
理想論の全體實に之
を供す。

なり。實理的學問が夙に取る所の見地は乃ち復た斯根本理想に外ならず、故に今其細目を擧ぐるを要せず。^八
大凡そ根本理想は一切理想の根本となる者なれば、其何れを取るかに隨うて、細大一切の理想、隨うて其實現の效果たる運命其者に大なる關係あるは勿論なり。

右根本理想の三類について、依他主義に屬すべき諸、理想の種別及得失は、所謂宗教史學の範圍に詳なり、茲に約説詳論するの望ましかれど、それは普通社會學の企及の外に在り、^九自依主義の種別に屬すべき諸の理想の種別得失は、形而上學の顯現、所謂哲學史科の範圍に屬す、但し其種別は依地主義の如く多からず、^{一〇}大觀主義に至りては、之に屬する理想の種別あらず、唯皆同一方向に開展して人人の奉ずる所に不完の差等あるのみ。

九
其一種の類別は本著
第三卷社會學第三
篇第二章宗教の敘説
に在り。

一〇
其一種の類別は本著
第二卷社會學第一
篇第一章世界觀の講
明に存せり。

功利主義を取れり。此兩端を比較すれば、其差天淵も嘗ならざれども、是は功利主義中の種別にして、大體に於いて一貫する者の存すること、本文所述の如し。

功利主義を非難する者は、主として行爲の結果の測り難きを論じ、此主義が自ら極めて實地に近易なるを主張するに拘らず、實は最も實地に疎遠なりと駁す。然らば若し行爲の結果にして測定せられ得るに至らば此主義の受くる此駁撃は自ら煙散すべき者なるべし。之と異なりて、若し其心術動機を顧ざるを以て缺點とするあらば、是れ永く去り難き非難ならむ、但し道德的功利主義は例外なり。

第一、本心主義。本心主義は正に功利主義に反し、行爲

一三
Bösch: Entwicklung
der sozialen Gerech-
tigkeit ist Sündenfall
の說を解明し、功利
主義の倫理及社會理
論の困難を打見の
なりと辨ず。

一四
暫く概括的稱呼とし
て新名稱を興ふ。

の標準は外に在らずして内に在り、内に在る我心、而も其不純を去れる玲瓏の本心、即ち所謂良心が示命する所に隨うて行動する、是れ吾人自ら持するの理想なりと説き、復て其行爲の効果如何を問はず、即ち同一の精神同一の動機目的より發する行爲は、其實地の効果如何を論ぜず悉く均等の價值を有すと爲す。この大體の大同の下に、亦種種の小異種別あり、或は智を以て究竟の示命者と爲す者あり、或は情を以てし、或は意を以てし、或は智と情とを以てし、或は情と意とを以て、又或は智情意を以て、更に又智情意統一の本體たる人格を以て、此に擬す。本心といふ者の成立の検討に於いても、至れる者あり、未だ至らざる者あり。其完全なる者に於いては智を必要の要素とし、其作

